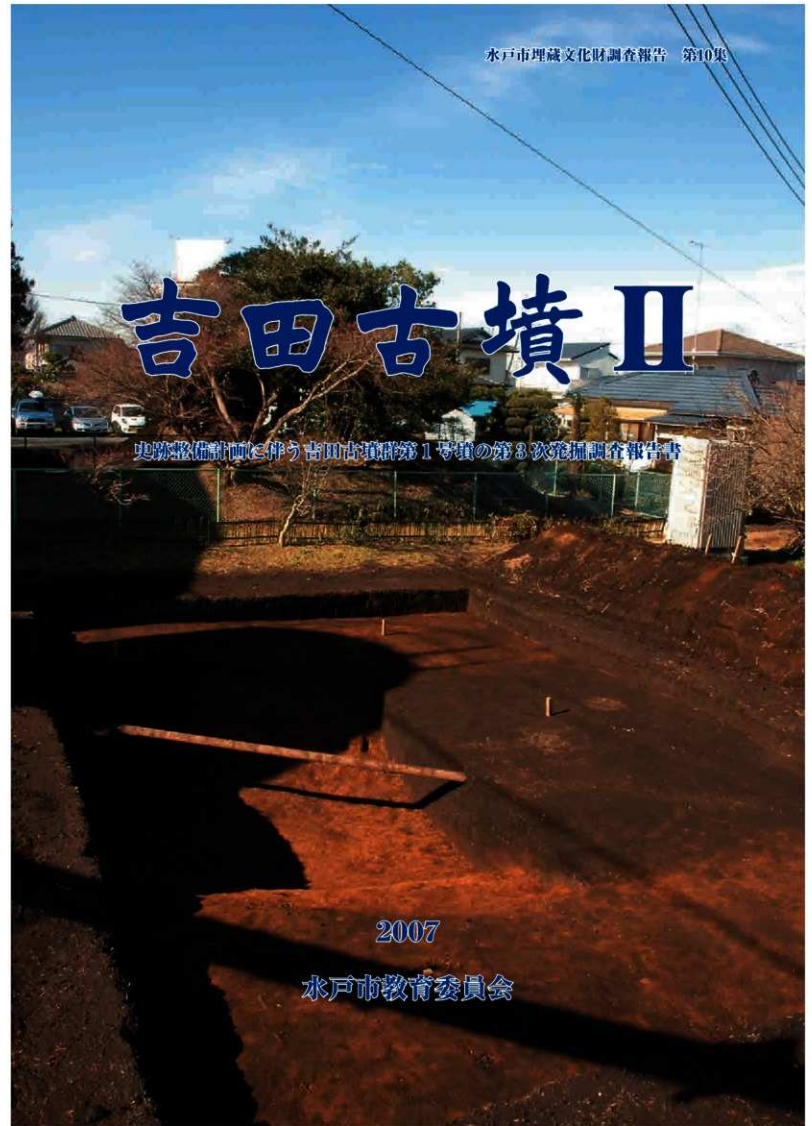


# 吉田古墳Ⅱ

史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書

2007

水戸市教育委員会





口絵写真 検出された周溝



第11トレンチ周溝（南から）

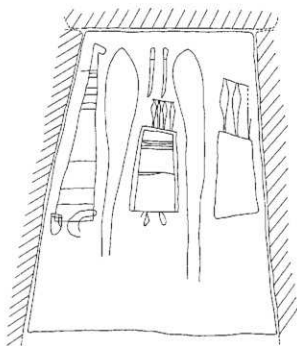


第10トレンチ周溝（西から）



# 吉田古墳Ⅱ

－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書－



2007

水戸市教育委員会



# 序

吉田古墳は、大正11年に国の史跡に指定された、水戸市を代表する装飾古墳です。大正3年に発見されたこの古墳は、東京帝国大学の柴田常恵・鳥居龍藏博士や、京都帝国大学の梅原末治博士ら、当時の考古学界を牽引した学者が相次いで調査に訪れ、黎明期の古墳文化研究のなかで大きな存在感を示しました。石室に描かれた壁画は、昭和47年の第1次調査の際に埋め戻され、現在は地中に保存されております。

平成17年、本市ではこの貴重な文化遺産を活用し、地域の活性化を図るため、新たな保存整備に向けた調査にとりかかりました。調査初年度の調査成果については、平成18年に報告書「吉田古墳Ⅰ」を刊行し、研究者はもとより、市民・県民の皆様を活用いただいているところです。

本書は、この保存整備に伴う2冊目の報告書です。今回の調査では、吉田古墳が八角形墳である可能性が極めて高くなったことが判明し、新聞紙上等で大きな話題を呼びました。吉田古墳が八角形墳だとすれば、古代常陸国の成り立ちを考える上で、たいへん重要な位置を占めることとなります。

また、古墳の北方に現存する第2号墳についても、測量調査を実施し、その調査結果を取録いたしました。

本書が学術資料として充分活用され、あわせて地域住民の皆様が郷土の文化財に愛着を持っていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にあたって、多大な御理解・御協力を賜りました、地域住民の皆様をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げ、序の言葉といたします。

平成19年3月

水戸市教育委員会

教育長 鯨 岡 武





## 例言

- 1 本書は、国指定史跡吉田古墳の史跡整備計画に伴い、水戸市教育委員会が国庫補助金と県費補助金を受けて実施した、吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書である。
- 2 調査は水戸市教育委員会が主体となって実施した。出土品の整理作業は水戸市埋蔵文化財整理センターで行った。
- 3 遺跡の名称、所在地、調査面積、調査期間等は以下のとおりである。

**遺跡名** 吉田古墳群（遺跡No72）

**所在地** 吉田古墳群第1号墳 茨城県水戸市元吉田町343-1, 345, 346, 347

第2号墳 茨城県水戸市元吉田町372

第3号墳 茨城県水戸市元吉田町613-4

第4号墳 茨城県水戸市元吉田町711

**第3次調査** 調査面積 131.18㎡

測量調査期間 2006年11月22日～2007年1月22日

発掘調査期間 2006年12月4日～2007年1月10日

整理期間 2007年1月23日～2007年3月27日

- 4 発掘調査の組織は別記のとおりである。
- 5 発掘調査は文化庁文化財記念物課・茨城県教育庁文化課の指導のもと、関口慶久が担当した。
- 7 第2号墳の測量調査は関口が担当した。第1～2号墳を中心とした広域の地形測量は株式会社海東測量設計事務所に委託し、関口がこれを監理した。
- 6 整理作業は川口武彦・関口・新垣清貴・渥美賢吾が担当し、関口が統括した。
- 8 本書の編集は関口が担当し、執筆は川口・関口が分担した。各項の文責は各文末に記載している。
- 9 出土した遺物および原図・写真類は、水戸市教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、下記の方々および機関より御指導・御協力を賜った。記して謝意を表したい（50音順・敬称略）。

青木 敬 飯島一生 池田朋生 今尾文昭 色川順子 大塚初重 岡見知紀 岡本東三  
加藤高蔵 加藤晴代 川崎純徳 瓦吹 堅 桐生直彦 黒澤彰哉 後藤道雄 坂井秀弥  
佐々木憲一 澤畑 実 塩谷 修 白石真理 鈴木素行 清野孝之 瀧野 巧 津川ひとみ  
生田日和利 日高 慎 本田信之 山中敏史 米川暢敬

茨城県教育庁文化課 荻谷建設株式会社 株式会社海東測量設計事務所 多久那研究会  
文化庁文化財部記念物課 有限会社三井考測 明利酒類株式会社 山梨県埋蔵文化財センター

## 調査組織

事務局	鯨岡 武（水戸市教育委員会教育長）
	小澤邦夫（水戸市教育委員会教育次長）
	森田秀人（水戸市教育委員会生涯学習課長）
	成田行弘（水戸市教育委員会生涯学習課長補佐）
	宮崎賢司（水戸市教育委員会生涯学習課文化財係長）
	黒須雅継（水戸市教育委員会生涯学習課文化財係主事）
	川口武彦（水戸市教育委員会生涯学習課文化財係文化財主事）
	新垣清貴（水戸市教育委員会生涯学習課文化財係埋蔵文化財専門員）
	調査担当者

## 水戸市史跡等整備検討専門委員（吉田古墳担当）

専門委員	今尾文昭（奈良県立橿原考古学研究所調査第一課総括研究員）
	大塚初重（明治大学名誉教授）
	川崎純徳（茨城県埋蔵文化財指導員）
	日高 慎（独立行政法人国立博物館東京国立博物館文化財部列品課列品室主任研究員）

## 調査・整理参加者名簿

渥美賢吾・新垣清貴・小野瀬智工・久保木きよ子・高安幸且・富田仁・花田繁二郎・菅川幸子・安島町子・大内恵子・鬼沢規子・田上雪枝・橋本祥子

## 凡例

- 1 測量平面図および遺構平面図は、国家標準直角座標Ⅹ系に基づく座標値を示し、方位は真北を基準としている。
- 2 遺構平面図・断面図の縮尺は1/60、微細図は1/10に統一した。
- 3 遺構断面図及び土層堆積図の標高は、その都度図中に示している。
- 4 遺構図版中におけるトーン等の表示は、下記に示した凡例図の基準で使用している。
- 5 遺物実測図の縮尺は、陶磁器・土器・ガラス製品は1/3、石製品は1/2、銭貨は1/1で掲載した。
- 6 掲載した出土遺物実測図のうち、反転復元した図面については、図の中心に▼を示した。
- 7 遺構・遺物の色調表記は、『新版標準土色帖』（再版、財団法人日本色彩研究所ほか）を基準とした。
- 8 引用・参考文献は、一括して本書の最後に示した。
- 10 表紙に使用した写真は、表裏両面とも第3次調査風景（第11トレンチ、2006年12月撮影）である。また中原の図は川上博義氏らによる吉田古墳壁画の実測図である（川上ほか1972より転載）。

## 凡例図



# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
<b>第Ⅰ章 調査に至る経緯</b>	<b>1</b>
<b>第Ⅱ章 遺跡の位置と環境</b>	<b>2</b>
第1節 行政区分	(2)
第2節 地理的環境	(2)
第3節 歴史的環境	(4)
<b>第Ⅲ章 吉田古墳群の測量調査</b>	<b>14</b>
第1節 調査の目的と方法	(14)
第2節 調査の経過	(14)
第3節 調査成果	(15)
<b>第Ⅳ章 吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査</b>	<b>20</b>
第1節 調査の目的と方法	(20)
第2節 調査の経過	(23)
第3節 調査成果の公開	(25)
第4節 基本層序	(26)
第5節 発見された遺構	(27)
第6節 出土した遺物	(37)
<b>第Ⅴ章 吉田古墳と八角形墳</b>	<b>45</b>
第1節 問題の所在	(45)
第2節 八角形墳調査・研究史抄	(45)
第3節 吉田古墳の墳形をめぐって	(50)
第4節 小結	(54)
おわりに	(55)
引用・参考文献	(56)
報告書抄録	
写真図版	

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧	7	第4表	出土遺物一覧表	44
第2表	平成18年度新聞記事一覧	25	第5表	全国主要八角形墳一覧	53
第3表	出土遺物観察表	41			

## 図版目次

第1図	調査区の位置	3	第10図	第10トレンチ	28
第2図	水戸市域の地形	4	第11図	第11トレンチ	30
第3図	大正期における 古墳周辺の地形	5	第12図	第12トレンチ	33
第4図	吉田古墳と周辺の遺跡	6	第13図	第3次調査出土遺物(1)	38
第5図	吉田古墳群測量図	16	第14図	第3次調査出土遺物(2)	40
第6図	第2号墳測量図	18	第15図	第1～3次調査で 検出した石室・周溝	51
第7図	トレンチ設定図	21	第16図	全国主要八角形墳	52
第8図	吉田古墳第3次調査関連記事	25	付図	第2号墳測量図	
第9図	土層堆積状況模式図	27			

## 写真図版目次

口絵写真	検出された周溝	写真図版1	第1号墳壁画拓影
挿図写真1	測量調査風景	写真図版2	第10トレンチ(1)
挿図写真2	第11トレンチ表土掘削	写真図版3	第10トレンチ(2)
挿図写真3	第10トレンチ調査風景	写真図版4	第11トレンチ(1)
挿図写真4	史跡等整備検討専門委員視察(1)	写真図版5	第11トレンチ(2)
挿図写真5	史跡等整備検討専門委員視察(2)	写真図版6	第12トレンチ・その他
挿図写真6	現地説明会風景	写真図版7	第3次調査出土遺物(1)
		写真図版8	第3次調査出土遺物(2)



## 第 I 章 調査に至る経緯

国指定史跡吉田古墳(第1号墳)は、昭和47年に吉田地区の環境整備調査として発掘調査(第1次調査)が実施されたものの、その後整備計画は中断を余儀なくされ、調査報告書も未刊のままとなっていた。

第1次調査から30年を経た平成14年、水戸市は第5次総合計画を策定し、「歴史的資源の活用」を施策の大綱の一つとして掲げ、歴史・芸術・文化の振興に向けて文化財の有効活用を推進しているところである。このような中、吉田古墳の整備・活用を推進することができないかという要望が周辺住民から寄せられるようになってきた。

これを受け水戸市では、史跡および周辺の整備と古墳の保護を図りながら、歴史的資源としての活用することを目的に、改めて吉田古墳の史跡整備を実施することとなった。

平成16年度、具体的な史跡整備計画に向けての準備を行い、平成17年度に国・県費補助金による第1号墳の範囲確認調査および測量調査を実施した(第2次調査)。第2次調査は周溝のトレンチ調査を行い、検出した周溝の平面プランから、円墳か多角形墳になる可能性が高くなった。これにより、吉田古墳が方墳であるという従来定説化されていた見解を見直す結果となった。なお、第1次・第2次調査の成果は平成18年に「吉田古墳Ⅰ」として調査報告書を刊行している(水戸市教育委員会2006、以下「吉田古墳Ⅰ」)。

第2次調査の成果を受け、平成18年度は第3次調査として、古墳の墳形の確定を目標とし、墳丘東西の周溝の形状を確認するべく、トレンチによる発掘調査を実施した。調査期間は平成18年12月4日より平成19年1月10日までである。

また、古墳群としての吉田古墳の理解がこれまで希薄であったことから、第1号墳の北側にある第2号墳について、10cmコンターに基づく墳丘測量調査を平成18年11月22日より平成19年1月22日まで実施した。

さらに基礎的資料として、古墳群周辺の微地形を把握する必要があるため、第1号墳から第2号墳周辺区域について1/100の精度による地形測量を実施した。

なお、これら吉田古墳の史跡整備事業にあたっては、学識経験者からの指導・助言が欠かせないため、水戸市では平成18年より「水戸市史跡等整備検討専門委員」を設置した(水戸市規則第67号)。吉田古墳の保存・整備・活用等に関する専門委員としては、今尾文昭(奈良県立橿原考古学研究所調査第一課総括研究員)・大塚初重(明治大学名誉教授)・川崎純徳(茨城県埋蔵文化財指導員)・日高慎(独立行政法人国立博物館東京国立博物館文化財部列品課列品室主任研究員)の4氏を選任した。平成18年度は専門委員による会議を3回開催し、うち吉田古墳に関わる会議は第2回会議(平成18年12月13日)・第3回会議(平成19年1月24日)の2回で、今後の調査方針等について適宜指導・助言を受けている。

(関口)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 行政区分

吉田古墳群第1号墳は、北緯36度21分19秒、東経140度28分41秒（日本測地系）、地番としては茨城県水戸市元吉田町347はかに位置する（第1図）。

この地は古代郷里制下にあつては那賀郡吉田郷に属していた。その後律令体制が衰退するにつれ、地方豪族により私称の郡が形成されるようになり、当地においても吉田郡が成立する。その時期は10世紀前半が下限で、12世紀後半には公認されたと推測されている（水戸市史編さん委員会1959）。

鎌倉時代末期から室町時代前期になると、私領の増加および国衛の支配体制の衰退によって郷が分裂し、郷内に村が形成された。かかる情勢下において、吉田郷のなかでも新しい村が誕生し、吉田村が成立したと考えられている（水戸市史編さん委員会1959）。

その後、文禄3（1594）年の太閤検地の実施により古代の郡名が復活し、那珂川以南は茨城郡に属すようになった。これにより当地の行政区分は常陸国茨城郡内吉田村として画定され、明治に至る。

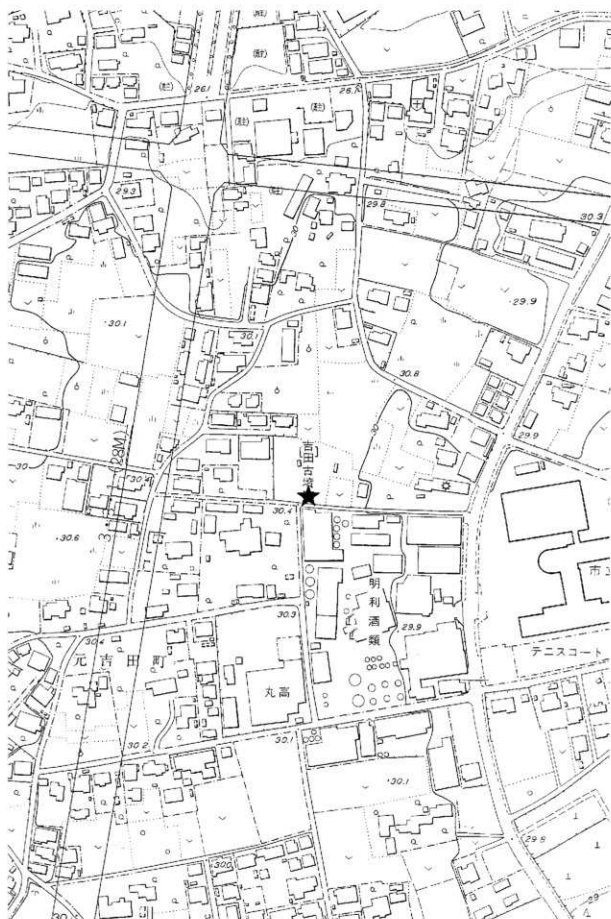
明治4（1871）年7月、廃藩置県により水戸を中心とする地域が水戸県となったが、同年11月に廃止され茨城県となった。明治6（1873）年の大小区制導入では、吉田村は第三大区第一小区に編入、明治8（1875）年の大小区改正により第一大区第四小区となった。明治11（1878）年、茨城郡が東西に分かれ、水戸市域は東茨城郡となった。明治15（1882）年と明治17（1884）年には、吉田・吉沢・米沢・東野地区が合併し吉田村連合村を構成し、明治22（1889）年の市町村制実施で吉田村連合村がそのまま吉田村となった。これにより当地域の行政区分は茨城県東茨城郡吉田村大字吉田となり、戦後を迎える。

昭和30（1955）年、吉田村大字吉田は水戸市に合併し、元吉田町となった。なお「元」の字は、明治22（1889）年の市町村制施行で水戸市が誕生した際、吉田村の一部区域が編入され水戸市吉田となっていたため、それと区別するために元吉田町としたものである。

### 第2節 地理的環境

吉田古墳群周辺の自然地形は、大きく二つの地形に区分される。一つは北部から東部に流れる那珂川とその支流の桜川・潤沼川より構成される沖積低地であり、もう一つは東茨城台地の北東部をなす水戸台地（標高上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地等）である。水戸台地には沢渡川、桜川、逆川が開析する支谷が深く入り込み、上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地と呼ばれる台地が構成される（第2図）。

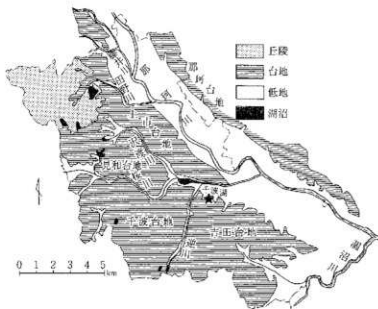




第1図 調査区的位置 (水戸市都市計画図1/2500に加筆)

水戸台地の地質は、第三紀層（凝灰質シルト岩。いわゆる水戸層）を基盤岩とし、その上に第四紀洪積層が重なってできている。洪積層の下層は古東京湾が海退するに伴って形成された上市層と呼ばれる砂礫層が堆積しており、上層に浅間山・男体山などの火山活動による降灰で形成された関東ローム層が堆積する。

吉田古墳は、水戸台地のうち最も東側にある、標高約30mの吉田台地上に位置する。吉田台地の地



第2図 水戸地域の地形(★が吉田古墳。水戸市史編さん委員会1999に加筆)

形をさらに細かく観察すると、鋸歯状に入り込んだ支谷によって複数の小台地が形成されていることがわかる。古墳はその小台地の北側縁部に築造された。現在は市街地化が進む中で景観は著しく変化してしましたが、第3図に示した明治年間の地形図から、眼下に千波湖を望む往時の景観を偲ぶことができよう。昭和初年に実地調査した鳥居龍藏は、「古墳のある位置は広い丘陵の稍や崖に近い所にあつて、その下は直ちに千波沼で、水戸方面を下に眺望せらるゝ極めてよい場所にある」と述べている（鳥居1928）。

### 第3節 歴史的環境

(第4図・第1表)

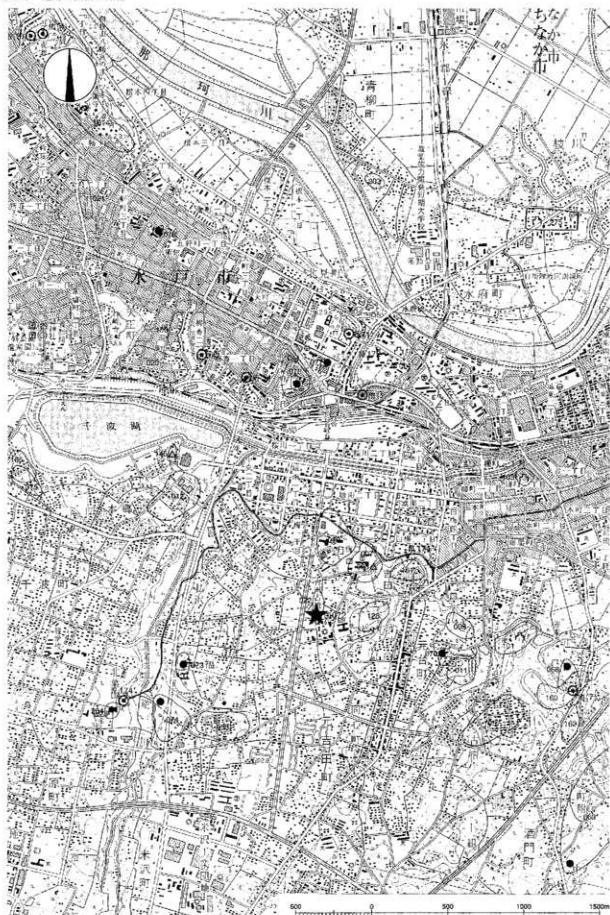
ここでは、吉田古墳をめぐる歴史的環境について、前節で述べた古墳周辺の地理的特徴をふまえて、時期別に項目を立てて述べていきたい。

なお古墳周辺の歴史的環境は、北側に接する水戸城とその城下町に象徴されるように、中世～近世の土地利用が特に活発なことは他言を要しないだろう。したがって純粋に遺跡周辺の土地利用を把握しようとするならば、自ずから中世～近世の叙述にウエイトがかかってくる。事実、今回の発掘調査により出土した多くの遺物は中世から近世・近代にかけてのものである（第4章第6節参照）。

しかしながら本報告の主たる目的は、吉田古墳の史跡整備に係る基礎的所見を提示することにある。したがって本節の叙述では、あえて古墳時代の時期にウエイトを置き、述べていくこととしたい。



第3図 大正期における古墳周辺の地形  
 (★が吉田古墳、大日本帝國陸地測量部1/25,000地形図「水戸」に加筆、第4図と同範囲)



第4図 吉田古墳と周辺の遺跡 (茨城県遺跡地図1/25,000に加筆, 第3図と同範囲, 図中の番号は第1表に対応)

第1表 周辺遺跡一覧（遺跡Noは第4図に対応）

遺跡No	遺跡名	種別	遺物	備考
007	水戸南高校遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)、弥生土器、土師器(古)	
008	吉田貝塚	貝塚	縄文土器(中)、叢石、凹石、石皿、貝輪	
009	安楽寺遺跡	集落跡	縄文土器(中、後)、石斧、石錘、凹石、石皿、土器片錘	
010	お下屋敷遺跡	集落跡	縄文土器(前～後)、弥生土器(後)、土師器(古、平)	S43発掘調査
011	大沼町遺跡	集落跡	縄文土器(早、晩)、弥生土器(後)、土師器(古、奈良・平安)、須恵器(古、奈良・平安)	S63、H17発掘調査
012	下本郷遺跡	集落跡	縄文土器(中)、石斧、凹石	
020	釜神町遺跡	集落跡	縄文土器(中)、石斧、石皿、石棒	
021	並松町遺跡	集落跡	縄文土器(中)	
041	東照宮城内遺跡	集落跡	弥生土器	
058	米沢町遺跡	集落跡	土師器、須恵器	
062	茨城高等学校遺跡	集落跡	縄文土器(早、中、後)、土師器(奈良・平安)、須恵器(奈良・平安)	
068	酒門台古墳群	古墳群	円筒埴輪	後円1?、円2
069	谷田古墳群	古墳群	土師器(古)、埴輪(古)	前方後円墳1(2)、円墳5
070	大沼町古墳	古墳		円0(1)
072	吉田古墳群	古墳群	金環、鉄族、刀剣、勾玉	方1、円1
073	弘沢古墳群	古墳群		円0(2)
074	福沢古墳群	古墳群		円3(4)
075	千波山古墳群	古墳群		後円1、円2
076	東照宮城内古墳群	古墳群		円0(3)
077	無名古墳	古墳		円0(1)
078	五軒町古墳群	古墳群		円0(2)
101	吉田城跡	城館跡		
103	武熊故城	城館跡		
106	千波山遺跡	城館跡	縄文土器(中)、打製石斧、石鏃	
128	薬王院東遺跡	集落跡	縄文土器(中)、弥生土器(後)、土師器(奈良・平安)、須恵器(奈良・平安)	H1発掘調査
142	梅香火葬墓跡	火葬墓	須恵器(奈良・平安)	
146	柳崎貝塚	貝塚	縄文土器(早、前)	
152	田野台遺跡	集落跡	縄文土器、土師器(古)、須恵器	
159	幸町遺跡	集落跡	縄文土器	
160	酒門台遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古、奈良・平安)、須恵器(奈良・平安)、土師質土器、陶器	
161	吉田神社遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古)、須恵器	
162	荷鞍坂遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古、奈良・平安)、須恵器(奈良・平安)、円筒埴輪、形象埴輪、陶器	
172	水戸城跡	城館跡	丸瓦、平瓦、釘、扉金具、陶磁器、土器	
174	笠原水道	水道跡	石樋	
233	青柳町遺跡			
234	笠原古墳群			
275	枝川城跡	城館跡		ひたちなか市
国(1)	田弘道館			国指定特別史跡
国(2)	常磐公園			国指定史跡
国(3)	常磐公園			国指定名勝
国(4)	白旗山八幡宮のオハツキイナヨウ			国指定天然記念物
市(1)	義公生誕の地			市指定史跡
市(2)	藤田東湖生誕の地			市指定史跡
市(3)	常磐共有墓地			市指定史跡
市(4)	水戸殉難志士の墓			市指定史跡
市(7)	酒門共有墓地			市指定史跡
市(9)	光藻			市指定天然記念物
市(14)	水戸城跡の大シイ			市指定天然記念物

(茨城県教育庁文化課2001、水戸市教育委員会1999をもとに作成)

### 第1項 先土器時代の様相

那珂川流域の先土器時代遺跡は、ひたちなか市や水戸市において確認されているものの、調査が先土器時代の調査を目的にしない場合が多く、その様相は必ずしも明確ではない。

吉田台地では、涸沼川の支流である石川川によって開析された谷の南側台地上にある森戸遺跡において、尖頭器をはじめとする剥片資料がわずかながら出土している（常道村史編さん委員会1989）。吉田古墳の東南約1kmに位置する大鋸町遺跡第3地点では、9世紀前半の堅穴住居址覆土中からではあるが、チャート製の尖頭器が出土している（東京航業研究所2006）。また栗崎町や下入野町で採集された資料を川口武彦氏が報告しており（川口2002・2005）、徐々にではあるが当該期の生活を窺う資料は増加しつつある。

### 第2項 縄文時代の歴史的環境

縄文早期末から前期前半にかけて、縄文海進がはじまり、現在の海岸線から直線距離で十数キロ奥に入った吉田古墳周辺まで及ぶようになる。この時期の貝塚としては、千波町の柳崎貝塚、谷田町の谷田貝塚などで発掘調査が行われている（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。当該地周辺においてこの時期の集落は現段階では確認されていないが、薬王院東遺跡の発掘調査では縄文早期土器の破片が出土しており、土地利用の痕跡がわずかながら窺える（水戸市薬王院東遺跡発掘調査会1990）。このほかに元吉田町の横宿遺跡で縄文早期の田戸下層式土器が採集されている（水戸市教育委員会1999）。

縄文中期から後期になると遺跡数が増加し、集落の規模が広がる傾向が窺える。吉田台地では元吉田町にある下畑遺跡の発掘調査が実施され、約30基の袋状土坑が検出されている。出土土器の中心は中期後半の加曾利EⅡ～Ⅲ式期である。住居址は1件のみ検出されているが、これは調査区が限定されていたため、袋状土坑集中区の周辺に相應の集落が展開していたことはほぼ確実である（水戸市下畑遺跡発掘調査会1985）。谷田町の下の内遺跡では、陸田造成時に不時発見され遺跡の大部分は調査されず削平を余儀なくされたが、縄文中期から晩期後葉に至る土器群、土製品、骨角器、多様な石器類が出土した（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。また大鋸町遺跡第2地点では加曾利E式最終末段階の土坑群が検出されている（地域文化財コンサルタント2005）。

この時期の貝塚としては、吉田古墳の北方に吉田貝塚が挙げられよう。昭和37（1962）年配水管施設工事に伴い不時発見された。厚さ40cmの貝層が6m×1mの範囲で確認され、縄文中期～中期の土器片や石器類、貝輪などが出土している（茨城県教育委員会1982）。また昭和61（1986）年に道路舗装補修工事に伴い貝塚隣接地で確認調査が実施されており、厚さ10～15cmの貝層が確認されていることから、貝塚は現在の包蔵地範囲からさらに広がるのが想定される（郡司1992）。

縄文晚期になると、遺跡数自体が減少しその様相が極端に不透明になる。吉田台地では、さきに触れた下の内遺跡の調査において、縄文晚期中～後葉を主体とする土器群が出土している。土器群には東北地方に分布するものも相当数認められ、安行系文化と亀ヶ岡式文化の漸移地域としての特色を窺わせる資料群として位置づけられる（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。

### 第3項 弥生時代の歴史的環境

弥生時代の遺跡は、茨城県下では一般的に中期前半から認められることが知られているが、吉田台地での調査事例は後期に至って確認されるようになる。

元吉田町のお下屋敷遺跡では、土砂採取工事に伴い不時発見されたため限定的な調査を余儀なくされたが、十王台式期に属する住居址5軒と、それに後続する時期の住居址1軒を検出している（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。

吉田古墳群に東接する薬王院東遺跡の発掘調査では、後期の竪穴住居址10軒、竪穴上遺構1期が検出されている。吉田古墳第2次調査においても表土からの出土ではあるが弥生土器片2点が出土しており、相応の土地利用があったことが窺える。

吉田古墳の東南に位置する大鋸町遺跡は、これまで3次にわたる発掘調査が実施され、9軒の住居址および土坑群が検出されている（第1次調査：水戸市大鋸町遺跡発掘調査会1988、第2次調査：地域文化財コンサルタント2005、第3次調査：東京航業研究所2006）。

また埜坪遺跡（酒門町）、横宿遺跡（元吉田町）、酒門台遺跡（酒門町）、吉田神社遺跡（宮内町）、荷鞍坂遺跡（酒門町）などにおいて、分布調査により弥生後期の十王台式土器が採集されている（水戸市教育委員会1999）。

以上のように、吉田古墳周辺では弥生後期より徐々に集落が営まれるようになり、土地利用が活発となっていく傾向が見受けられるのである。

### 第4項 古墳時代の歴史的環境

那珂川流域はかねてより仲国造の支配領域に比定されており、分布する古墳はその関連性が論じられてきた。

吉田台地における古墳時代前期に比定される遺跡の調査事例としては、大鋸町遺跡（前掲）、お下屋敷遺跡（水戸市教育委員会1999）、大串遺跡（常澄村教育委員会1986、水戸市1996）、北屋敷古墳（水戸市1995）等が挙げられる。性格はいずれも集落跡であり、弥生時代後期に引き続き、那珂川下流域において相応の土地利用がなされていたことが窺える。

当該期の古墳については、吉田台地上では現在のところ認められていない。古墳出現期の事例は、那珂川を吉田地区よりさらに上流に遡った、藤井町の二の沢B遺跡の1号周溝墓・2号周溝墓・6号周溝墓が挙げられよう（茨城県教育財団2003）。これら3基の周溝墓は前方後方形を呈しており、那珂川下流域における出現期古墳のなかでも最初期に位置づけられる。また飯富町の安戸星古墳1号墳も前方後方墳であり、二の沢B遺跡の前方後方形周溝墓と同様の時期に造営されたものと考えられている（日高2004）。

これに続く古墳としては、鹿島灘に面する丘陵上に位置する、大洗町の坊主山古墳（前方後方墳、全長50m）、鏡塚古墳（前方後円墳、全長105.5m）、車塚古墳（円墳が、直径95m）が代表例として挙げられる。坊主山→鏡塚→車塚の順築造されたことが墳形から推測されており（茂木1987）、鏡塚古墳の築造年代は4世紀末に比定される（内原町教育委員会1999）。

古墳時代中期の古墳としては、吉田古墳の北西、上市台地上の愛宕山古墳（前方後円墳、全長136.5m）およびその東側に隣接する姫塚古墳（前方後円墳、全長58m）が挙げられる。愛宕山古墳は採集埴輪の分析から5世紀前半の築造と推測されている（内原町教育委員会1999）。

吉田古墳周辺における当該期の集落跡としては、大鋸町遺跡（前掲）が発掘事例として挙げられる。

古墳時代後期・終末期になると、那珂川流域の各地に集落が営まれるようになる。吉田台地上では、小仲根遺跡（水戸市教育委員会2002）、大鋸町遺跡（前掲）、下畑遺跡（前掲）、梶内遺跡（水戸市1995）、大串遺跡（前掲）などで発掘調査が実施され、6世紀から7世紀前葉に至る住居址が検出されている。

川口武彦氏は当該期の集落の様相について、市内で確認されている集落が軒並み7世紀前半でその営みを停止する中、ひとり台渡里遺跡が7世紀後半の集落として認められることに注目し、「以上のような後期・終末期の集落跡の動向を見ると、5世紀後葉から7世紀前半まで継続的に営まれていたものが、7世紀前葉遺構に形成が途絶え、7世紀の後半に至って、後に郡衙が営まれる地域の近隣（＝筆者註：台渡里遺跡周辺）に突如として形成し始めるという現象が指摘できようか」と述べている（水戸市教育委員会2004）。

以上のような終末期の集落形成のあり方は、吉田古墳、そしてそれに後続もしくは併行して営まれていった、渡里町域を中心とする那賀郡衙・郡寺の展開過程に直接関わる重要な知見として留意すべきであろう。

後期・終末期の古墳についても、集落同様、市内各地に営まれるようになる。後期古墳としては北屋敷古墳群（大串町）、大串古墳群（大串町）、富士山古墳群（田谷町）、小原内古墳群（田谷町）、赤塚古墳群（河和田町）、加倉井古墳群（加倉井町）、牛伏古墳群（牛伏町）が、終末期古墳としてはニガサワ古墳群（藤井町）、西原古墳群（堀町）、白石古墳群（田谷町）、高天原古墳群（河和田町）、大井古墳群（飯富町）、吉田古墳群（元吉田町）、フジヤマ古墳（栗崎町）、谷田古墳群（酒門町）、権現山横穴墓群（下国井町）が挙げられる。

このうち発掘調査によって具体的な様相が報告されている事例としては、北屋敷古墳群（茨城県教育財団1993、水戸市1995）、牛伏古墳群（内原町教育委員会1999）、ニガサワ古墳群（茨城県教育財団2003）、そして吉田古墳群（水戸市教育委員会2006）がある。

北屋敷古墳群は2基存在し、第1号墳は円墳で、横穴式石室内から直刀・小刀・鉄鏃などの副葬品が出土している。第2号墳は墳形を確定できていないが、裾部から円筒埴輪・人物埴輪などが出土し、古墳の造営は6世紀後半に比定される。

牛伏古墳群は前方後円墳7基、円墳9基から構成される一大古墳群で、5世紀末から6世紀後半にかけて連綿と営まれたことが判明している。

ニガサワ古墳群は前方後円墳4基と円墳1基から構成され、いずれも埴輪は出土していない。6世紀後半から7世紀前葉にかけて造営されたとみられる。

吉田古墳群は装飾古墳である第1号墳（国指定史跡）を中心に多くの研究者による調査が行われた。その研究史についてはすでに「吉田古墳1」において纏めており、詳細はそちらを参照されたい。発掘調査はこれまで2回にわたって行われている（第1次調査：昭和47年、第2次調査：平成17年）。第1



次調査では墳丘・周溝・石室・線刻壁画の一連の調査が初めて実施された。石室構造から7世紀中葉頃の築造とみられる。

第2次調査では、検出した周溝から約26mの規模を有していたことが判明した。那珂川下流域では大型古墳に継ぐ規模であったことが窺える。また墳形については、従来定説であった吉田古墳＝方墳説に対し、周溝が方形に廻らない可能性が高いことが判明した。

第2次調査における古墳時代の出土遺物としては、埴輪片が4点出土している。これらは第1号墳に近接して築造された古墳（すでに削平されている）のものである可能性が高く、古墳群としての吉田古墳を窺う上で重要な資料といえる。

さて、ここに列挙した古墳群のほかにも、市内には年代不詳の古墳群が多く確認されており、その中には後期・終末期に営まれた古墳は少なくないものと推測される。かかる傾向は吉田台地上においても同様であり、大型古墳の終焉→群集墳の増大という、全国的な趨勢<sup>※</sup>支配体制の変革が当地においても進行していたことを示唆していよう。

また那賀川下流域は装飾古墳が比較的集中して分布することが知られており、那珂川右岸には吉田古墳と権現山横穴墓群が、那珂川左岸にはひたちなか市虎塚古墳、金上殿塚古墳が那珂台地上に営まれている。とくに虎塚古墳が立地する中丸川流域には、笠谷古墳群、大平古墳群、三反田古墳群、十五郎横穴墓群などの古墳・横穴墓が集中しており、奥津城が連綿として造営された「聖なる地」として位置づけられる。

これらの装飾古墳は各モチーフに共通点が多く、相互に何らかの連関があつて造営されたことはほぼ疑いない。吉田古墳の被葬者像を窺う上で虎塚古墳を中心とした中丸川流域の古墳群の造営のあり方は留意すべきであろう。

### 第5項 奈良・平安時代の歴史的環境

水戸市域における奈良・平安時代の遺跡としてまず挙げられるのは、渡里町一帯を中心に分布する、台渡里廃寺・アラヤ遺跡・長者山遺跡・渡里町遺跡・文京2丁目遺跡・台渡里遺跡・堀遺跡・西原遺跡などの一大遺跡群である。これらの遺跡群は、いわゆる「郡寺」を示唆する遺構・遺物を豊富に包蔵する台渡里廃寺をはじめ、政庁院・正倉院・寺院・集落が一体となった官衙関連遺跡である「台渡里遺跡群」として理解されており、那賀郡の中核域であった。

また台渡里廃寺に東接して古代官道である東海道が敷かれ、それに伴い那珂川右岸に河内駅家が設置されたことが『常陸国風土記』に記載されているように、この地は東北経営の前線として中央政権下にあつても相応に重要視されていたことが窺える。

このような律令期における台渡里遺跡群の性格を考えると、遺跡群と吉田古墳とは地理的には若干の距離があるものの、7世紀後半以降の歴史的環境を考える上で両者の関連性は常に留意する必要がある。

吉田古墳周辺における奈良・平安時代の遺跡としては、お下屋敷遺跡（前掲）、薬王院東遺跡（前掲）、大鋸町遺跡（前掲）で発掘調査が実施され、いずれも集落跡が検出されている。大鋸町遺跡第1次・

第2次・第3次調査では8世紀第2四半期から9世紀代を主体とする約30軒の住居址が、吉田古墳に隣接する薬王院東遺跡では8世紀後半～9世紀にかかる38軒の住居址や工房跡が検出され、8世紀代に集落が活発に営まれる状況が窺える。吉田古墳の第2次調査（前掲）においても、周溝覆土上層から8世紀第4四半期～9世紀代1四半期の須恵器坏が出土している。

このほか埴埜遺跡（酒門町）、酒門台遺跡（酒門町）、吉田神社遺跡（宮内町）、荷鞍坂遺跡（酒門町）などで当該期の遺物が採集されており、その散布状況から集落の存在が窺える。

9世紀に至り、律令体制による中央集権体制が衰微していくなかで、弘仁3（812）年、河内駅家が廃止され、10世紀第1四半期には台渡里廃寺も廃絶する。

この9世紀から10世紀に至る間に、吉田神社が次第に勢力をもち、第1節で述べたように10世紀前半には吉田郡が那珂郡から独立するほどの政治的・宗教的勢力となる。このような平安時代以降の状況について時野谷滋氏は「すでに平安時代初期の水戸地方では、繁栄の中心が渡里台地方面から、千波湖低地帯を越えてしだいに吉田台地方面に移動しており、その後この地方には、吉田神社の神威がおおうとともに、（中略）かつ吉田薬王院および元石川町の円照寺を中心とする天台宗が弘通していたのである」とまとめている（水戸市史編さん委員会1963）。

このように吉田神社は那珂川流域における新興勢力として在地支配を行うようになるが、それに後続して武士団が吉田郡に進出していき、12世紀前半までには常陸平氏である吉田氏が郡司となり、在庁官人として吉田郡を勢力下に置き、吉田神社との軋轢を生みながら中世を迎える。

## 第6項 中世の歴史的環境

鎌倉幕府が成立すると、吉田郡内は吉田氏およびその一族である石川氏・馬場氏が御家人となり、地頭として在地支配を行った。吉田氏の居館として有力視されているのが、常照寺境内を中心として遺構が残る、吉田城跡である。発掘調査は実施されていないが、詳細な縄張り図が作成され、藤木久志氏による分析が行われている（水戸市史編さん委員会1963）。また馬場氏は千波湖を挟んだ上市台地上、現在の水戸城付近に居を構えたと推測されている。

その後南北朝の争乱のなか水戸地方には江戸氏が進出し、馬場氏から水戸城を奪取してこの地を本拠とするようになる。平成17年度に水戸市教育委員会が実施した水戸城二の丸跡の発掘調査では、江戸氏が大規模な普請・作事を行っていたことが判明し、15～16世紀における江戸氏の勢力が並々ならぬものであったことが窺えた（整理中）。

中世末には豊臣政権のもと佐竹氏が常陸国を統一し、水戸城を居城として拡張・整備した。ここに至って吉田城は廃城になったと藤木氏は述べている（前掲）。

吉田古墳周辺の中世期の遺跡は、大館町遺跡第2次調査（前掲）で龍泉窯系の青磁碗など中世を通じて若干の遺物が包含層中より出土しているほか、米沢町遺跡における試掘・確認調査で15～16世紀代に比定される遺構・遺物がわずかながら検出している（日考研茨城2007）。

このように中世の吉田台地は、在地武士団による目まぐるしい割拠のなかで、吉田郡の中心地として常に攻防が繰り返されつつ、その拠点は徐々に上市台地の水戸城に移っていったという推移が迫れ

るのである。

### 第7項 近世の歴史的環境

近世初頭、佐竹氏の秋田移封、武田信吉入封を経て、慶長14（1609）年徳川頼房の入封を以て、御三家水戸徳川家による水戸藩が成立する。水戸城を居城として城下町は整備され、吉田台地の一部もそれに伴い城下町に取り込まれた。大鋸町遺跡も城下町内にあり、第2次調査（前掲）では鉄滓や輪の羽口など生産に関わる遺物が出土している。「大鋸町」という地名から木挽職に関わる町人地であったことが推測され、大工道具の直しなど小規模な鍛冶工房が存在していたのであろうか。

近世の吉田地区の土地利用を考える上で、長岡から吉田に至り、下市に抜ける幹線道路である江戸街道の存在抜きには語れないだろう。江戸街道は藩主や家臣が江戸と国元を往来する道として、また東北諸藩の参勤交代の道筋として重要な位置を占めると共に、台地際に位置する吉田神社周辺は、有事の際の軍事的拠点としても重要視されていたことと思われる。

吉田古墳周辺は水戸街道からやや離れており、城下町の範囲からは外れていた。しかし城下町近郊農村として、商品作物などの需要は相当高かったものと思われ、土地利用は比較的活発であったことが想定される。それを反映するかのよう、吉田古墳の2次調査においても17世紀～19世紀にかかる近世遺物が比較的多く出土している（『吉田古墳Ⅰ』）。吉田古墳の墳丘が極端に小型化した理由として、このような近世期における開墾による影響も充分考えられるのではなかろうか。

また安政年間、吉田古墳に南接して加藤氏が酒造業を創業した（現在の明利酒類株式会社）。

### 第8項 近代の歴史的環境

水戸市は明治42（1909）年より第14師団編成下の歩兵第二連隊を中核とした陸軍衛戍が置かれ、また「満蒙」開拓のため義勇軍訓練所が設立されるなど、日露戦争後からアジア・太平洋戦争にかかる時期は軍都としての側面を有していた。

吉田古墳の2次調査において統制番号を付した磁器碗が出土しており、かかる軍事的要素の濃い遺物は、吉田地区の近～現代の土地利用を考える上で重要な資料として位置づけられる。また、第2次調査において近代遺物は最も出土率が高く、活発な土地利用を窺わせる（前掲）。吉田古墳壁画の発見も、地元の加藤徳之助氏が採土のために墳丘を取り崩したことによるものである。このように吉田地区における土地の改変は近代にいたって急速に進み、現在に至るのである。

\*本章は「吉田古墳Ⅰ」（水戸市教育委員会2006）所収の「第2章 遺跡の位置と環境」に、その後の調査成果をふまえ適宜加筆・訂正したものである。

（関口）

## 第Ⅲ章 吉田古墳群の測量調査

### 第1節 調査の目的と方法

吉田古墳の測量調査については、1964年、1972年、2005年の3度にわたって実施されている（『吉田古墳1』第2章参照）。

しかし、これらの測量調査は第1号墳の墳丘のみを対象としたものであって、「群」全体が立地する地形を把握し、地形と遺跡の有機的な連関を読みとろうという試みはこれまでなされてこなかった。

また、第1号墳の北方約150mに位置する第2号墳についても、測量調査はこれまでなされていない。第2号墳は第1号墳を除けば唯一墳丘が現存している古墳であり、第1号墳の歴史的な性格を窺う上で重要な意味を持つことは疑いない。

したがって今年度の測量調査は、上記の現状と課題をふまえ、以下の2点を目標として実施した。

- ①吉田古墳群全体の地形を把握すること。
- ②第2号墳の測量を行い、規模・形状等についての基礎資料を得ること。

目標①については、広域の地形測量が必要となり、単年度で遺跡全域の測量を実施することは困難であった。そこで今回は1号墳～2号墳にかかるエリア（約33,530㎡）を対象とし、1/500縮尺の測量を実施した。実施期間は2006年10月27日～2007年3月15日である（準備・整理期間を含む）。

目標②については、トータルステーションを用い、1/50縮尺・10cmコンタにて測量を実施した。これは2005年実施の第1号墳の測量調査とほぼ同一水準であり、第1号墳との比較検討が可能となるよう配慮した。実施期間は2006年11月22日～2007年1月22日である。

### 第2節 調査の経過

第2号墳の測量作業は計6日間を要した。その経過は以下の通りである。

2006年11月22日（水） 測量作業初日。機材搬入、草刈り、レベル移動、杭打ち作業を実施する。ベンチマーク（30.509m）を墳丘南西隅のブロック角上に設定した。

2006年11月29日（水） 測量作業2日目。測量開始。トータルステーションを用い、10cm間隔でコンタラインを、縮尺1/50で墳丘の測量を開始した。

2006年11月30日（木） 測量作業3日目。墳丘測量を継続しかし12月4日より発掘調査開始のため、測量は本日で一時中断。

2007年1月12日（金） 測量作業4日目。1月10日に発掘調査が終了したことを受け、作業を再開。

2007年1月15日（月） 測量作業5日目。

2007年1月18日（木） 測量作業6日目。

2007年1月22日（月） 測量作業7日目。第2号墳の測量終了。最終チェックの後、機材撤収。



挿図写真1 測量調査風景

### 第3節 調査成果

#### 第1項 吉田古墳群の地形測量

吉田古墳群の地形測量については第1節で述べたように、平成18年度は第1号墳～第2号墳にかけての測量作業を実施した。

測量対象地域は、すでに宅地化が相当進行し盛土あるいは削平による造成工事が繰り返されている地域である。大小の擁壁等による急激な標高差も加わり、一帯の微地形の把握を困難にしている。このため、舗装道路など通常の測量図ならば等高線を入れられない部分にも測量を加え、少しでも旧地形の理解を容易にするよう努めた。

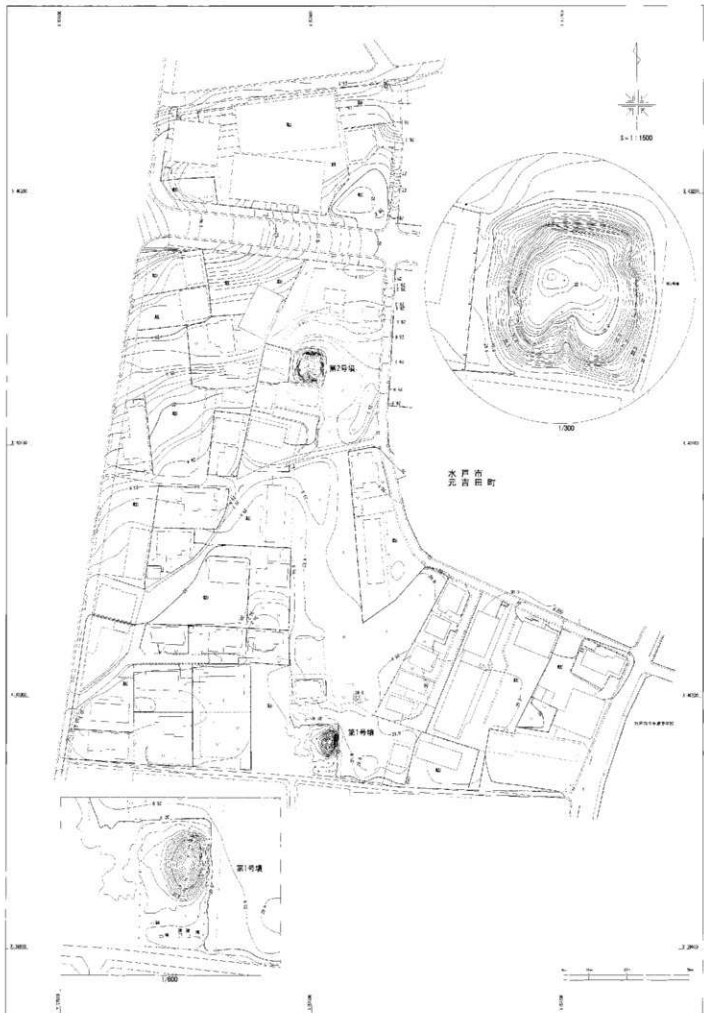
その成果が付図1で、それを1/1500縮尺にしたものが第5図である。

これをみると、等高線は後世の土地の改変による乱れをみせるものの、地形と古墳群の連関を窺う上で興味深い点を幾つか読みとることができる。

**第2号墳の立地について** まず最初に注目すべき点は、標高29m前後を境に地形が大きく変化し、そこが遺跡の境にほぼ相当することである。標高29mの等高線は、第2号墳の西側から北側に向かって認められる。そして北に向かい、おおむね平面30m間隔で標高1m程度落ち込んでいく。この落ち込みはさらに北側に及び、やがてかつて干波湖が広がっていた城南地区に至る。すなわちこの標高29mラインは、測量対象範囲内において、吉田台地の上がり際にほぼ相当すると判断できるのである。

第2号墳は、この標高29mラインよりわずかに10数m台地側に寄った地点から立ち上がっており、まさに台地の縁に築造されたことが明白である。むしろそれは意図的と考えたほうが自然であろう。このことは第2号墳の性格を窺う上で重要な所見と考えられる。

**第1号墳の立地について** 2点目は、標高29～30m台での1号墳の位置である。さきに述べたように、標高29m前後で地形は大きく変化し、そこが吉田台地の縁のラインにほぼ相当する。そしてその南方はほぼ平坦化した土地が広がり、その標高は29m～30m台で推移している。標高30m以上のレベルが確認される部分の多くは、盛土造成による土地の改変が著しいところであり、旧地形は標高29m台を



第5図 吉田古墳群測量図

推移していた可能性も考えられるだろう。いずれにせよ、広域に捉えれば台地上は非常に平坦で、地形の変化が少ない一帯であることが指摘できよう。

第1号墳は、台地の縁から約140～190mほど奥まったところに位置している。2005年の発掘調査により、第1号墳の規模は26mを有し、終末期における那珂川下流域の古墳のなかでは大型古墳に次ぐ規模であることが判明したとはいえ、この距離では台地下から第1号墳を眺望することは不可能である。すなわち、吉田古墳「群」としては台地縁における立地を意図的に選択した可能性が高いものの、第1号墳については台地縁への造営を選択せず、やや奥まった箇所に造営したのである。

ほぼ平坦化した台地上において、地形的な制約があったとはほぼ考えにくい。むしろ第1号墳の立地については、かつてこの一帯に無数にあったとされる古墳群との相関関係を窺うべきであろう。

**隠滅した古墳の痕跡について** 3点目は、この隠滅した古墳の痕跡らしき地形の変化が窺える点である。標高29～30mで推移するこのエリアは、1m～50cmレベルでみればほぼ平坦といってよい。しかし10cmレベルの微地形でみた場合、等高線が屈曲し、不自然な高まりを示す箇所が複数認められる。これは古墳群の痕跡を窺う上で、見逃せない所見であると考えられる。

無論、土地の改変が繰り返された一帯において、このような微地形の変化を即座に旧地形の変化と結びつけて理解することは、充分に留意が必要である。しかしその上で、少なくとも明治・大正期までは多くの古墳が存在していたという伝承を踏まえるならば、一帯に認められる不自然な高まりは、古墳の痕跡を窺う余地はあるだろう。

## 第2項 第2号墳の測量調査

今回測量した第2号墳の図面が付図2で、それを1/200縮尺にしたものが第6図である。一見きれいな方墳に見えるのだが、実は戦中・戦後に幾度となく改変が加わっていることが、聞き取りによって明かとなっている（後述）。かかる知見を加味しつつ、第2号墳の現況について以下にまとめることとする。

**古墳の形状・規模について** 第6図をみると、現在における墳丘の形状は、ほぼ正方形を呈していることがわかる。規模は南北14.5m、東西14mで、高さは3.0mをはかることが判明した。第1号墳の現況が南北約12m、東西約8m、高さ約1.6mであるから、第2号墳はそれよりも一回り大きく、現況において吉田古墳群最大の墳丘規模を有している。

**後世の改変について** しかしそれはあくまでも現況の規模である。言うまでもなく文化財は地上・埋蔵・無形文化財の別にかかわらず、幾度にもわたる後世の改変により成り立ったものである。したがって遺構の本来の形状を推し量るために、後世の改変の状況を把握する作業が必要となる。

そこで測量中、周辺住民の方々から、近現代の土地利用と第2号墳の関わりについて、聞き取り調査を行った。その結果、いくつかの興味深い知見を得ることができた。それをまとめると以下の5点に集約される。

- ①戦時中、墳丘の北東隅に防空壕がつくられたこと。
- ②戦時中、墳丘の西側に大きな防空壕が南北方向につくられていたが、天井が崩落し消滅したこと。



第6図 第2号墳測量図 (S=1/150)



- ③戦後、墳頂に拝所が設けられ、そこに詣る道づくりのため、南側の墳丘を大規模に削ったこと。
- ④戦後、近隣の道路敷設等に伴って土が足りなくなると、採土のため墳丘を恒常的に取り崩したと。
- ⑤戦後、南側に隣接する宅地（現宅地の前に建っていた家か）の建設に伴い地表を掘削した際、大きな板石が出土し、それを廃棄したこと。

この開き取り結果をふまえて測量図を検証すると、第6図に示した①の部分に凹みが認められ、これが開き取り①に該当する。また開き取り②によれば、墳丘西側の法面（図中②）は既に崩落しており、旧地形を全く留めていないことになる。そしてこのことは、少なくとも防空壕が崩落する以前は、第2号墳の東西規模は27.9mより大きかったことも示している。さらに図中③の凹みは、これまで横穴式石室が崩落した痕跡とみられていたが、開き取り③によって現代の人為的な改変であることが明らかとなった。

**墳形について** また開き取り④から、戦後相当規模の改変が繰り返し行われていたことが窺える。したがって第2号墳の墳形について、現在の形状から判断すれば方墳と認識できるものの、開き取り④から本来の墳形を留めている可能性は極めて低いと判断せざるを得ない。第1号墳同様、本来の墳形を窺うには周溝の確認等による所見が必須となろう。

**石室について** 図中★で示した部分に、横穴式石室の側壁と思われる石が露出している。石材は脆い軟質の凝灰岩で、第1号墳と同じ石材を用いたものとみられる。石室が南に開口していたのも第1号墳と同様である。

露出地点★が石室どの部分にあたるのかは、不明なところが多いものの、開き取り②から墳丘の西側法面がさらに西へ張り出していたことを考慮すると、墳丘の中軸はさらに西に寄っていたと判断され、露出地点★は東側壁の一部と想定することもできよう。

また、開き取り⑤による板石の出土地点は、図中⑤にあたるものと思われ、石室の一部であったことはほぼ間違いないだろう。石室は露出地点★よりさらに南へ延びていたことは確実であり、またそれを覆う封土も南側に延びていたものと考えられる。板石が地表下から検出されたことを考えると、半地下式の横穴式石室であったと思われる。

以上のように今回の古墳群の地形測量・第2号墳の測量により、従来知り得なかった幾つかの知見が得られ、吉田古墳の整備計画を立てていく上での基礎資料が得られた。この成果は、吉田古墳を「群」として把握し、より豊かな歴史叙述を組み立てていくなかで重要な意義をもつものと言ってよいだろう。しかしながら今回の地形測量範囲は遺跡の一部でしかなく、測量範囲の東・西・南側の微地形については、未だ分からない部分が多い。今後も引き続き地形測量を継続し、基礎資料の充足を図ることが肝要と思われる。

（関口）

## 第IV章 第1号墳の第3次発掘調査

### 第1節 調査の目的と方法

#### 第1項 発掘調査

今回の発掘調査の目的は、第1章で述べたように、周溝プランの確認によって墳形を把握することにある。

発掘トレンチについては、墳丘東側に1本(第10トレンチ)、西側に1本(第11トレンチ)、北東側に1本(第12トレンチ)の計3本を設定した(第7図)。トレンチの名称は、第1次調査のトレンチNa(第1トレンチ～第5トレンチ)および第2次調査のトレンチNb(第6トレンチ～第9トレンチ)を引き継いで連番にすることとし、第10トレンチ～第12トレンチと称した。

なお第7図にあるように、第10トレンチと前回調査の第3・5・7トレンチは、それぞれ部分的に重複する形となっているので留意されたい。

各トレンチの設定方法については以下の通りである。

**第10トレンチ** 第2次調査において筆者は、「第7トレンチの下端の平面形は鋭角の角度を有しており(中略)現在得られているデータからは、必ずしも真円を描くようなプランを想定できないことも事実である。したがって、今後の墳形確定のための確認調査の際には、円墳に限らず多角形墳など、古墳時代終末期に認められる多様な墳形を想定しながら調査を進めていきたい」と報告したように(『吉田古墳1』、第7トレンチにおいて認められたプランは看過できない点がある。

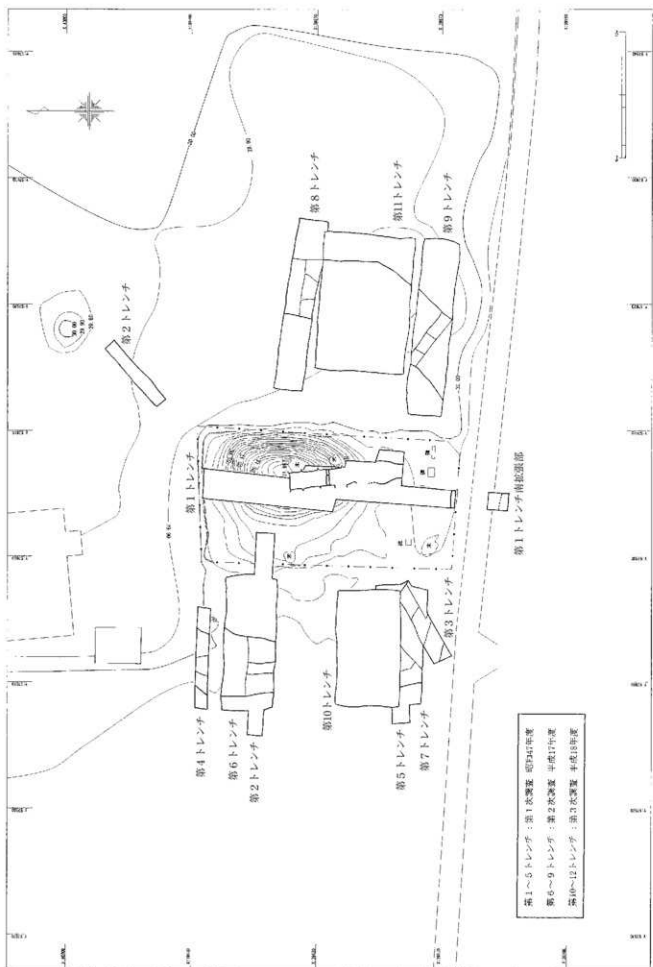
そこで第10トレンチは、第7トレンチと重複する形でその北側に設定した。第7トレンチのプランを再精査し、さらに北側に延びるプランを検出することで、その形状をより明確に捉えられるよう配慮したものである。規模は9.2m×5.2m(47.84㎡)である。

**第11トレンチ** 第2次調査における第8トレンチと第9トレンチとの間に設定した。規模は10.7m×7.2m(77.04㎡)である。これにより墳丘東側周溝の大部分を確認できることになる。

なお第11トレンチの設定にあたっては、第8・9トレンチに重複しないよう留意した。重複させた場合、第8・9トレンチの壁面で確認できた土層断面が失われてしまう。今後再確認が必要になることや、墳丘から周溝にかけての通しの土層断面を確認する機会があるかもしれないことを想定し、できるだけ様々な調査方法が選択できるよう、その余地を残そうと考えたことによるものである。

**第12トレンチ** これまでの周溝確認は、墳丘東・西・南側において実施されていたが、北側については未だ確認されていない。そこで今次調査では、墳丘の北東側に6.3m×1.0m(6.3㎡)の12トレンチを設定した。本トレンチは条件の許す限りにおいてでしか設定できなかったため、北側の周溝の様相を把握するために十分な面積等を、必ずしも確保できたわけではない。

表土掘削は重機(φ0.25バックホー)によって行い、遺構確認面である関東ローム層上層から人力に



第7図 トレンチ設定図 (S=1/300)

による掘削を行った。

周溝の調査については、史跡整備を目的とした調査であることから、上面プランによる確認を原則とした。しかし遺構の性格・構築年代・廃絶年代等を確認するため、適宜サブトレンチを設定し、必要最小限の掘削を行った。

平面図は4m間隔のグリッドを設定し、遺り方測量により1/20縮尺で作成した。微細図は1/2縮尺で作成した。グリッド杭は公共座標第Ⅴ系に基づいた観測を行い、座標上にトレンチの位置を乗せた。

断面図はすべて1/20縮尺で作成した。

記録写真については600万画素のデジタルカメラ、35mmカラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。全景撮影は、明利酒類株式会社の協力を得、古墳に隣接する同社工場敷地内のタンクに登らせて頂いて撮影したほか、荻谷建設株式会社の協力を得て高所作業車上より撮影した。

また映像記録として、デジタルビデオカメラによる撮影も適宜行った。

埋め戻しは、茨城県教育庁文化課と協議の上で、周溝に山砂を敷いた上で、重機により発生土で埋め戻した。

## 第2項 整理作業

整理作業は現場終了後の2007年1月から3月にかけて順次実施した。

**遺構** 遺構については、図面台帳の作成、写真整理などの基礎作業をまず実施した。その後平面図・セクション図・写真記録の3つを相互に検討し、いくつかの図面について修正を加えて掲載した。

**遺物** 遺物は遺物収納箱にして3箱が出土し、これを水戸市埋蔵文化財整理センターに収蔵し、水洗・注記・接合作業を行った。

出土遺物の注記については全点注記を行っている。注記名は水戸市内遺跡の統一注記方法に基づき、遺跡・地点番号を示す「ミ72-01」の後ろに出土地点（例えば第11トレンチ内攪乱出土の場合は「11Tカク」）を記入した。

実測個体の選出については、周溝内出土遺物および、古墳造営・廃絶に関わる資料を優先的に掲載した。しかしながら出土遺物の多くは表土・攪乱内出土であり、古墳の造営・廃絶について窺うことのできる資料は多くない。ただし表土・攪乱内出土とはいえ、出土遺物の様相から客土によるものではなく、おおむね遺跡の土地利用を反映する資料であると判断したため、弥生～現代の遺物に至るまで、遺存度のよい遺物の多くは掲載した。ただし同一器形・同一意匠の遺物は、遺存度がよくても図面化していない。図面化した遺物は全て観察表を添え、写真図版を掲載した。写真撮影は600万画素のデジタルカメラを使用した。また、出土した全ての遺物について分類・カウントし、第4表に掲載した。

以上の整理方法は第2次調査におけるそれと同一であり（水戸市教育委員会2006）、「吉田古墳Ⅰ」と本報告書を対照できるよう配慮した。

## 第2節 調査の経過

調査面積にして132.88㎡を開放している。発掘調査は2006年12月4日～2007年1月10日の間、断年  
末年始を挟むなど断続的ではあるが、実働16日間をかけて行った。

2006年12月4日(月):発掘調査初日。10トレンチ・11トレンチを設定し、0.25バックホーにて表土掘削。

昨年度(第2次調査)はローム面が明確にわかるレベルを確認面としたが、今回はローム面の最  
上層(表土層との漸移的な面)を確認面とした。極力遺構を残した状態で確認するためである。11  
トレンチを先行して実施する。その結果、11トレンチにおいて角のある周溝プランが確認された。  
昨年度の調査において案じていた、多角形墳の可能性が出てきた。プラン検出状況を撮影。川崎  
純徳氏(茨城県埋蔵文化財指導員)来訪。

2006年12月5日(火):発掘調査2日目。10トレンチは表土掘削終了。攪乱が多いものの、やはり多  
角形墳を後押しするような直線的なプランを確認。高所作業車に乗り、10トレンチのプラン検出  
状況写真を撮影。重機による表土掘削は本日で終了。

12トレンチを設定。表土掘削から全て人力で行う。

本日は朝から現場に霜が降りていたため、シートをかけることにした。

2006年12月6日(水):発掘調査3日目。10トレンチでは昨年度のサブトレンチの再発掘、1号遺構  
の半截・セクション写真、胎衣埋納遺構(4・5号遺構)の遺物出土状況を撮影。

11トレンチのプラン検出状況を撮影。その後、サブトレンチを設定し、掘削をはじめる。

12トレンチは本日も掘削途中。

2006年12月7日(木):発掘調査4日目。1号遺構のセクション図・突掘写真撮影。10トレンチの杭  
打ちを実施。11号トレンチはサブトレンチを順次掘削途中。12号遺構は表土掘削が終了し、周溝  
プラン検出写真を撮影。その後周溝の掘削に入る。飯島一生氏(茨城県教育庁文化課)来訪。

2006年12月11日(月):発掘調査5日目。11・12トレンチの掘削を順次進行中。

2006年12月12日(火):発掘調査6日目。雨天のなか第11トレンチ内サブトレンチの突掘を行う。10  
～12トレンチの仮プラン図を作成。

2006年12月13日(水):発掘調査7日目。12トレンチの周溝掘削。水戸市史跡等整備検討専門委員第  
2回会議開催。大塚初重・川崎純徳・今尾文昭・日高慎の各委員に調査の中間経過を報告後、現



挿図写真2 第11トレンチ表土掘削



挿図写真3 第10トレンチ調査風景

地視察。「八角形墳の可能性が高い」との共通理解を得る。

2006年12月14日（木）：発掘調査8日目。11トレンチの遺物のドットあげ。

2006年12月15日（金）：発掘調査9日目。現地説明会の準備に一日かける。テント搬入、看板搬入等。

午前2時より現地で記者発表。

2006年12月17日（日）：現地説明会開催。県内・県外各地から240人が見学。

2006年12月18日（月）：発掘調査10日目。調査区壁面セクション・サブトレンチセクションの写真撮影・図面作成。佐々木憲一氏（明治大学）来訪。

2006年12月19日（火）：発掘調査11日目。調査区壁面セクション・サブトレンチセクションの写真撮影・図面終了。10トレンチ2号・3号・4号遺構掘削。10トレンチの周溝のレベルが第7トレンチでの確認面のレベルより高く、プラン確認がわかりにくいいため、第7トレンチと同一レベルまで周溝を掘削する。水戸市文化財保護審議会開催。同審議委員による現地視察。

2006年12月20日（水）：発掘調査12日目。10トレンチ2号～4号遺構調査終了。11トレンチのサブトレンチ北側を70cmほど拡張。12トレンチ全景撮影。

2006年12月22日（金）：発掘調査13日目。5・6号遺構の微細図等を作成。11トレンチは平面図作成途中。青山俊明氏（茨城県教育庁文化課）来訪。

2006年12月25日（月）：発掘調査14日目。11・12トレンチの平面図終了。11トレンチ全景撮影終了。これにより11・12トレンチの全調査が終了する。10トレンチは平面図作成途中。桐生直彦氏（多摩市教育委員会）来訪。2006年の調査はこれで一旦終了。

2007年1月9日（月）：発掘調査15日目。現場再開。埋め戻し前に11トレンチと10トレンチについて、高所作業車から全景撮影を行う。その後、11トレンチ・12トレンチから周溝に山砂を敷いた後、埋め戻しを行う。10トレンチは平面図の作成の続き。12トレンチは埋め戻し終了。

2007年1月10日（火）：発掘調査16日目。10トレンチの平面図および壁面セクション・土層注記終了。これによりすべての発掘調査が終了する。10トレンチの埋め戻し・11トレンチの埋め戻し・機材整備。10トレンチについては埋め戻し後駐車場に使用するため、周溝内に山砂を敷き、その上に残土を戻し、最上部は碎石を敷いた。11トレンチについては調査後、畑地として使用するため、埋め戻し後トラクターをかけた。



挿図写真4 史跡等整備検討専門委員視察（1）



挿図写真5 史跡等整備検討専門委員視察（2）

### 第3節 調査成果の公開

第3次調査の成果については、報道発表および現地説明会を開催し、市民への公開をはかった。古墳周辺は道路が狭く、また駐車スペースもないことから、現地説明会の開催には車両通行規制・駐車スペースの確保・導線の検討など、相当期間の準備が必要である。このような事情から、昨年度（第2次調査）は現地説明会の開催を断念した経緯があった（「吉田古墳1」）。今年度はその反省に立ち、調査実施前から準備を開始した。開催にあたっては水戸市広報（「広報みと」№1155、2006年12月1日発行）誌上および新聞発表のなかで周知を行い、駐車場の確保については千波小学校および明利酒類株式会社の駐車場を臨時駐車場として使用させて頂いた。

現地説明会は2006年12月17日（日）午後1時～4時にかけて実施した。県内・県外各地から240人の方々が見学に訪れた。市職員による説明の後、何人もの見学者の方々から熱心な質疑応答があり、関心の高さを窺わせた。

なお第3次調査に係る新聞掲載記事は第2表のとおりである。



挿図写真6 現地説明会風景

第2表 平成18年度新聞記事一覧

掲載年月日	新聞名	掲載見出し
平成18年12月16日	茨城新聞	「吉田古墳 八角形墳か」
平成18年12月16日	読売新聞（茨城版）	「水戸の吉田古墳 八角形墳の可能性」
平成18年12月16日	東京新聞（茨城版）	「水戸の吉田古墳 数少ない八角形墳か」
平成18年12月16日	朝日新聞（茨城版）	「水戸の吉田古墳 「八角」の可能性」
平成18年12月21日	毎日新聞（茨城版）	「吉田古墳 八角形墳の可能性」



第8図 吉田古墳第3次調査関連記事（H18.12.16 読売新聞）

## 第4節 基本層序

第3次調査における基本層序は、第2次調査において確認した基本層序と同一基準で記録した。I～IV層に大別され、各層はさらに細分される。I～IV層の大別については第2次調査と同じであるが、細分した層については、Ic-2層、IIc層は今次調査によって新たに追加された層位である。

したがって下記に示した層序は第2次・第3次調査の統一層序として理解頂きたい。

I層 現代の盛土・攪乱。いわゆる表土層。Ia層～Id層に細分される。

Ia層 碎石層。

Ib層 黒褐色土層(10YR2/2)。ローム粒子( $\phi \sim 5\text{mm}$ )中量、炭化物微量含む。締まりやや強、粘性やや弱。

Ic層 黒褐色土層(10YR3/2)。ローム粒子( $\phi \sim 2\text{mm}$ )少量含む。締まり・粘性やや弱。耕作土。

Ic-2層 黒褐色土層(10YR3/1)。ローム粒子( $\phi \sim 2\text{mm}$ )微量含む。締まり・粘性やや弱。耕作土。篠の根が著しく入る。Ic層のバリエーションと判断される。

Id層 黒色土層(10YR2/1)。ローム粒子( $\phi \sim 1\text{mm}$ )少量含む。締まり・粘性やや弱。耕作土。

II層 近代か。IIa層～IIc層に細分される。

IIa層 黒褐色土層(10YR2/2)。ロームブロック( $\phi 10\text{mm}$ )少量、ローム粒子( $\phi \sim 3\text{mm}$ )やや多く含む。締まり・粘性やや弱。

IIb層 黒褐色土層(10YR2/2)。ローム粒子( $\phi \sim 5\text{mm}$ )少量含む。締まり・粘性やや弱。

IIc層 黒褐色土層(10YR2/2)。ローム粒子( $\phi \sim 1\text{mm}$ )少量含む。締まりあり、粘性やや弱。

III層 近代以前。IIIa層～IIIb層に細分される。

IIIa層 しぶい黄褐色土層(10YR4/3)。ローム粒子( $\phi \sim 1\text{mm}$ )多量含む。しまりあり。粘性やや強。いずれも周溝の内側に堆積しており、一部において周溝内に入り込んでいる部分も見受けられる(第9トレンチ)ことから、墳丘の裾が崩れた可能性も考えられる。

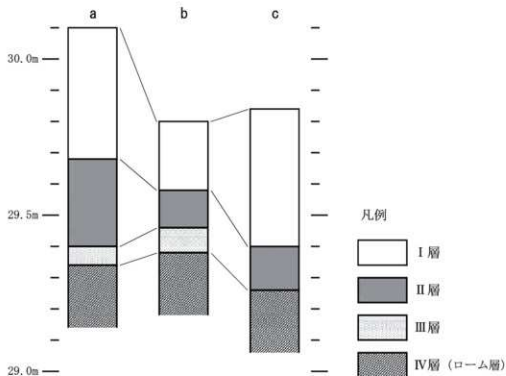
IIIb層 黒褐色土層(10YR2/3)。ロームブロック( $\phi 10 \sim 30\text{mm}$ )、ローム粒子( $\phi \sim 5\text{mm}$ )多量含む。締まり・粘性あり。

IV層 関東ローム層(地山)。

第3次調査における土層堆積の柱状模式図は第9図の通りである。これを参照すると、墳丘西側のa地点と、東側のb・c地点において、表土(I層)トップとローム層(IV層)トップの標高に大きな差があることが明瞭にみとれる。この傾向は第2次調査時のそれと全く同じである。

この傾向の理由は、第2次調査時に近代以後の墳丘西側・東側の土地利用の偏差をあげ、墳丘東側の土地利用があまりなされていないことから、東側の堆積(今次調査ではb・c地点)のほうがより旧地形に近いデータを得ることができる、と記した(『吉田古墳I』)。今回もまた同様であろう。





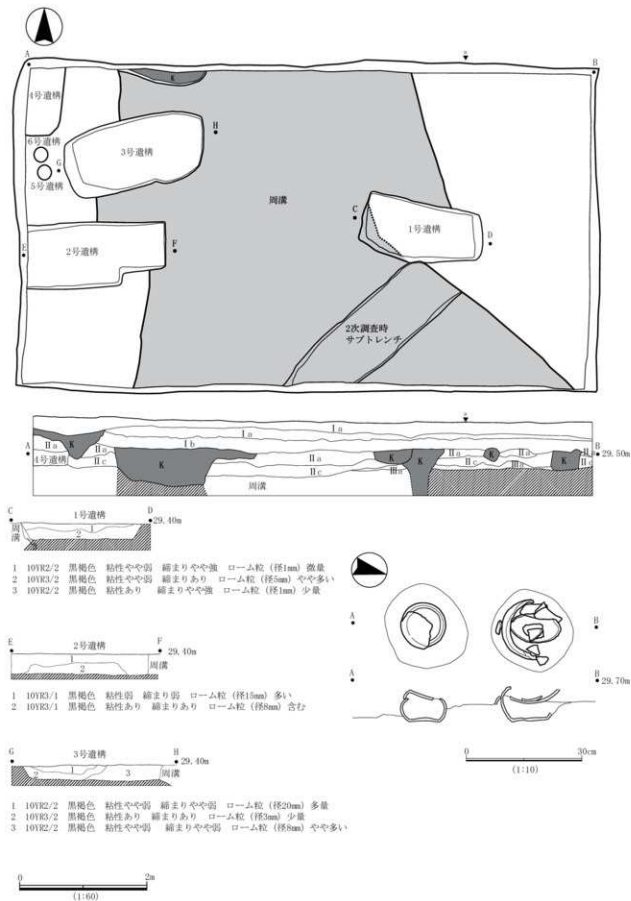
第9図 土層堆積状況模式図（観察地点は第10～12図に示した）

## 第5節 発見された遺構

第3次調査で調査した遺構は、第1号墳に伴う周溝と、近世以降の遺構5基である。本調査は史跡整備に係る調査であることから、原則として遺構はプラン確認に留めている。しかし調査上やむをえない事情がある場合に限り、遺構覆土の掘削を実施することもある。近世以降の遺構5基とは、上記の事情により記録保存による調査を実施した遺構であり、検出された遺構の総数ではないので留意されたい。

さて、これまでの一連の調査では、古墳にかかる遺構に関しては「石室」「周溝」という呼称を用いており、「○号遺構」のような遺構番号は使用していない。本報告もそれに倣い、周溝に関してはこれまで通り「周溝」と呼称する。そして古墳の構成要素以外の遺構については、「1号遺構、2号遺構、…」というように遺構番号を付けることとした。今回は近世以降の遺構が5基検出されていることから、1号～5号遺構までの遺構番号を付けた。

以下、各トレンチごとに確認された周溝について所見を述べた後、その他の時代の遺構（第1～5号遺構）についての報告を記すこととした。



第10図 第10トレンチ

### 第1項 第10トレンチ検出の周溝 (第10図)

**位置・重複関係等** 周溝は墳頂から約15.5mの位置（上面が削平され墳裾・外提が明確に押さえられないため、石室奥壁～周溝下端の距離を示す。以下同じ）で検出された。確認面はローム層上面である。小規模な攪乱を受ける。1号遺構・2号遺構・3号遺構に切られる。

**形態** 検出規模は幅4.2m～3.3m、確認面からの深さは90cmを測る。注目すべきは平面プランである。墳裾部のプランは1号遺構付近で「く」の字上に屈曲することが確認された。屈曲の角度は145°を測る。屈曲点から北側はN-13°-W、南側はN-50°-Wの傾きを有する。

外提部のプランは直線状で、ほぼ真北方向の傾きを有する。墳裾部で確認された屈曲角が外提にも存在する可能性は高いものの、残念ながら調査区内では確認できなかった。プランの形状からすると、調査区外に屈曲角が存在する可能性が高いものと想定される。

本トレンチを含む墳丘西側一帯は近～現代における土地利用が著しく、上面が大幅に削平されているばかりか、確認面のレベルも一定ではない。したがって周溝の立ち上がり部分の形状が明確ではないことが多い。というのも、周溝の立ち上がりはとて緩やかな角度であるため、数cmのレベル差といえどプラン確認に大きな影響を及ぼすからである。例えば2号遺構の北側と南側では約20cmの高低差がある（北側のほうが高い）。北側と南側で周溝が70cmも前後しているのはそのためである。

**覆土** 10トレンチではプラン確認のみで周溝の掘削は実施していない。1トレンチ南側のサブトレンチは第7トレンチのE-Fラインのサブトレンチである（『吉田古墳Ⅰ』54頁参照）。

**遺物** 第10トレンチからは46点の遺物が出土しているが（1～6号遺構出土遺物を除く）、周溝はプラン確認に止めたため、覆土からの出土遺物はない。なお第10トレンチ出土遺物は全て近世以降の遺物である（第4表）。

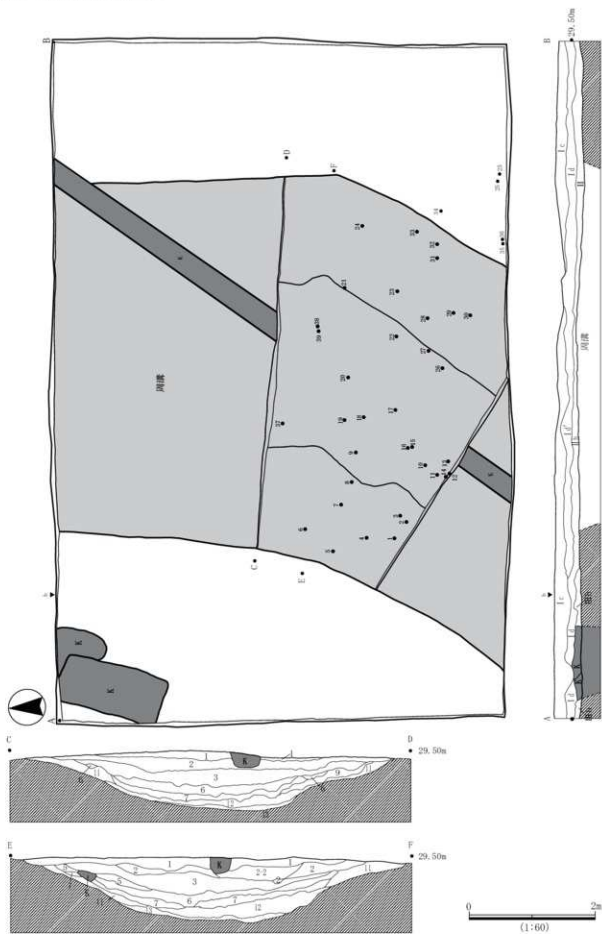
**時期** 周溝プランを検出した限りの所見では、最上層で周溝3層（第2項参照）が確認されたことから、第6～第9トレンチと同様の埋没過程を辿ったと判断される。第7トレンチ3層から8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の須恵器坏が出土していることから（『吉田古墳Ⅰ』62頁参照）、本トレンチも当該時期に埋没した可能性が高い。

### 第2項 第11トレンチ検出の周溝 (第11図)

**位置・重複関係等** 周溝は墳頂から約16mの位置で検出された。確認面はローム層上面である。周溝上層の中央部分を東南方向から南西方向にかけて現代の鉄管が縦断するものの、それ以外の攪乱はなく、遺存状態は良好である。

**形態** 検出規模は幅6.1m～6.5m、稜角間では幅6.7mを測る。確認面からの深さは90cmを測る。平面プランでは第10トレンチ同様、「く」の字状の稜角が認められた。とくに外提部に顕著な稜角が認められ、その北側と南側は直線的なプランを呈する。外提部の稜角はちょうど150°で、その北側はN-4°-E、南側はN-34°-Wの傾きを有する。

外提部でみられた直線的なプランと稜角に比べ、墳裾部のプランは対照的である。緩やかな弧を描き、明瞭な稜角は見受けられない。確認面が外提部と墳裾部でレベル差が大幅に違うわけでもないこ



第11図 第11トレンチ

とから、この偏差は後世の攪乱や削平等によるものであるとは考えにくい。むしろ本古墳の性格を判断する上で本質的な情報として、この偏差を理解していく必要があるものと考えられる。

**覆土** 稜角部分にサブトレンチを設定し2本のセクション図を作成した（C-Dライン、E-Fライン）。

第1号墳周溝の土層については、第2次調査における土層注記と整合性を図り、比較検討を容易にするため、同次調査の注記番号に準拠し、それに新たに確認された層を追加していく方式をとった。今次調査における周溝の土層は以下の通りである。第2b層と第13層が今次調査で新たに追加された層位である。

第1層 黒褐色土層（10YR2/2）。ローム粒子（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）中量含む。締まりあり。粘性やや弱。キメ粗。  
草木の根が腐ったものか。

第2層 黒褐色土層（10YR2/2）。ローム粒子（ $\phi \sim 1\text{mm}$ ）微量含む。締まり・粘性あり。キメ密。

第2b層 黒褐色土層（10YR3/2）。ローム粒子（ $\phi \sim 1\text{mm}$ ）微量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。  
2層のバリエーションか。

第3層 黒褐色土層（10YR2/2）。ローム粒子（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）少量含む。締まりやや強。粘性やや弱。キメ粗。  
草木の根が腐ったものか。

第4層 黒色土層（10YR2/1）。ローム粒子（ $\phi \sim 3\text{mm}$ ）少量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。

第5層 黒色土層（10YR2/1）。ローム粒子（ $\phi \sim 1\text{mm}$ ）微量含む。締まり・粘性やや弱。キメやや密。

第6層 黒褐色土層（10YR2/3）。ローム粒子（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）中量含む。締まり強。粘性あり。キメ密。硬化層。

第7層 黒褐色土層（7.5YR3/1）。ローム粒子（ $\phi \sim 1\text{mm}$ ）微量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。

第8層 黒褐色土層（10YR3/2）。ローム粒子（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）少量含む。締まり・粘性やや弱。キメ密。

第9層 黒褐色土層（10YR2/3）。ローム粒子（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）やや多く含む。締まりあり。粘性やや弱。キメ密。

第10層 黒褐色土層（10YR3/2）。ローム粒子（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）多量含む。締まりやや強。粘性やや弱。キメ密。

第11層 黒褐色土層（10YR3/2）。ローム粒子（ $\phi \sim 3\text{mm}$ ）やや多く含む。締まりやや強。粘性やや弱。  
キメ密。

第12層 黒褐色土層（10YR3/2）。ロームブロック（ $\phi 10\text{mm}$ ）少量、ローム粒子（ $\phi \sim 3\text{mm}$ ）多量含む。  
締まり・粘性あり。キメ密。

第13層 黒褐色土層（10YR2/3）。ローム粒子（ $\phi \sim 2\text{mm}$ ）多量含む。締まり強・粘性やや弱。キメ密。  
貼床のように底面に堆積する。

さてセクション図を参照すると、墳裾側および外提側双方からの流入土により埋没していることが窺える。埋没過程としては、

①第13層（ローム粒子を多量に含み、固い）→②第11層・第12層（ローム粒子を多量に含む）→③第7層（キメが細かい）→④第6層（硬化層）→⑤第3層（キメが粗くボソボソ）→⑥第2層（キメが細かい）→⑦第1層（キメが粗くボソボソ）

という、①→⑦過程が窺える。②→⑦の堆積過程については第2次調査でも同様であり、第1号墳周溝の埋没過程が斉一的であったことを裏付ける所見である。そしてもう一つ注目される所見としては、前回調査では認められなかった①の段階、すなわち第13層の存在である。第13層は貼床のように締め固めており、人為堆積であることは間違いない。第8トレンチ・第9トレンチでは第13層は認められておらず、限定的な堆積と理解されよう。確認面からの深さが第8・9トレンチは70～80cmであるのに対し、第11トレンチは90～100cmとやや深い。このレベル差を調整するための造作であろうか。

**遺物** 周溝内に設定したサブトレンチから58点の遺物が出土している（第4表）。これは既調査12トレンチの中で最大量である。一部に近世遺構の遺物も混入するものの、大半は弥生時代から平安時代の間の遺物で締められる。とりわけ埴輪片7点の出土は、今次調査で出土した埴輪の全てであり、吉田古墳群の展開過程を何う上で重要な資料といえよう（第6項参照）。

須恵器壺までうち40点はドットで取り上げている。本報告書で図示した古代以前の遺物9点は、全て本トレンチ内のドット上げ遺物である。

**時期** 古墳の埋没過程が一律であることから、他トレンチと同様9世紀第1四半期頃には埋没したとみられる。なおドット上げた遺物で古墳造営以後の遺物としては、Na17が8世紀前葉の平瓦（遺物No.9）で、Na10が平安時代の須恵器片の2点が上げられる。うちNa10は細片であり混入の可能性も捨てきれない。

### 第3項 第12トレンチ検出の周溝（第12図）

**位置・重複関係等** 周溝は墳頂から約16.5mの位置で検出された。確認面はローム層上面である。攪乱等はなく、遺存状況は良好である。

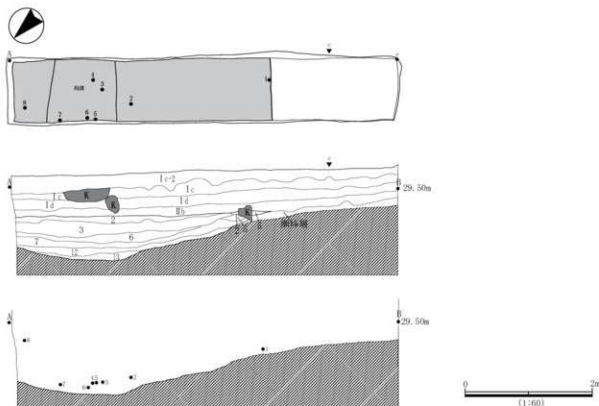
**形態** 前述の如く、本トレンチは所与の条件下での設定を余儀なくされたため、周溝の一部を確認・掘削することとなった。検出規模は幅4.1mであるが、これは周溝の一部の値であり、外提部は調査区外に延びている。

確認面からの深さは70cmを測る。平面プランは直線的ではあるが、幅1mのトレンチなので直線・曲線の区別は難しい。墳裾部立ち上がりはN-3°-Wの傾きを有する。

**覆土** 11トレンチと同様、①→⑦の埋没過程が窺える。ここでも13層が確認されていることは留意されよう。

**遺物** 周溝覆土から8点が出土し、全てドット上げを行っている（第4表）。奈良・平安時代の土師器細片がほとんどで、古代以前の遺物で図示できるものはなかった。

**時期** 古墳の埋没過程が一律であることから、他トレンチと同様9世紀第1四半期頃には埋没したとみられる。



第12図 第12トレンチ

#### 第4項 その他の遺構

今次調査では、第1号墳の周溝以外にも、6基の遺構を調査している。いずれも近世以降の所産であり、第1号墳の造営には直接関わりのない遺構である。しかし今尾文昭氏らが指摘するように、古墳が当初の造営意図を離れて、後世に舍利信仰の聖地となったり、納骨堂や仏教教化の道場として再利用されるなど（今尾2000）、古墳の存在が地域における土地利用のありように一定の影響を及ぼす可能性は考慮していく必要がある。

結論からいえば、以下に報告する6基の遺構が第1号墳を意識した痕跡は見受けられないものの、それはあくまでも3つのトレンチのみから得られた限定的な所見に過ぎない。かかる問題意識を継続的に持ちながら、古墳造営以後の遺構の展開状況について情報を蓄積していくことで、はじめて古墳と後世の土地利用の連関がみえてくることもあろう。

本項ではかかる問題意識に立脚しながら、個々の遺構について述べていきたい。

##### 第1号遺構（第10図）

**位置・重複関係等** 第10トレンチで確認された。確認面はローム層上面である。第1号墳周溝を切る。  
**形態** 平面形はいびつな長方形を呈する。断面は浅い逆台形をなし、底面は平滑である。規模は長軸

198cm×短軸99cm、確認面からの深さは24cmを測る。主軸方位はN-75°-Wの傾きを有する。

**覆土** 3層に分層される。土層注記は第10図参照。セクション図や締まりが固い点からみて、人為堆積である可能性が高い。

**遺物** 近世以降の遺物が20点出土している（第4表）。図示できる遺物はなかった。

**時期** 出土遺物や土質、形状、歴史的環境等を加味すれば、近世以降の所産である可能性が高い。

**遺構の性格** 不明。あえて推測するならば、明治以降、墳丘西側一帯には木造の人家が建っており、それに伴う何らかの地下施設であった可能性が考えられる。

#### 第2号遺構（第10図）

**位置・重複関係等** 第10トレンチで確認された。確認面はローム層上面である。第1号墳周溝を切る。

**形態** 平面形は西側が調査区外に延びているため不明だが、現況では長方形で南側が張り出す形状を呈している。断面は東側の立ち上がりは垂直であり、底面も平滑である。規模は現況で長軸216cm×短軸110cm、確認面からの深さは34cmを測る。主軸方位はN-86°-Eの傾きを有する。

**覆土** 2層に分層される。土層注記は第10図参照。セクション図からみて、人為堆積と判断される。

**遺物** 4点出土している（第4表）。うち1点が弥生中～後期の土器片で、他3点は近世以降の所産である。

**時期** 出土遺物や土質、形状、歴史的環境等を加味すれば、近世以降の所産である可能性が高い。

**遺構の性格** 不明。あえて推測するならば、明治以降、墳丘西側一帯には木造の人家が建っており、それに伴う何らかの地下施設であった可能性が考えられる。

#### 第3号遺構（第10図）

**位置・重複関係等** 第10トレンチで確認された。確認面はローム層上面である。第1号墳周溝を切る。

**形態** 平面形は隅丸長方形を呈する。断面は逆台形であるが、東側の立ち上がり角度に比べ西側の立ち上がり角度が緩い。これは後述するように一度掘り返されているためと見られる。底面は平滑である。規模は長軸228cm×短軸110cm、確認面からの深さは24cmを測る。主軸方位はN-76°-Eの傾きを有する。

**覆土** 3層に分層される。土層注記は第10図参照。第3層主体土により遺構が埋没してから、一度掘り返され、その後第1・2層主体土によって埋没したものとみられる。埋没が人為的であったのか否かについてはセクション図からは判断できない。

**遺物** 9点が出土している（第4表）。奈良・平安時代の須恵器破片が1点出土している他は全て近世以降の遺物である。うち2点を図示した（第14図）。

**時期** 出土遺物や土質、形状、歴史的環境等を加味すれば、近世以降の所産である可能性が高い。

**遺構の性格** 不明。あえて推測するならば、明治以降、墳丘西側一帯には木造の人家が建っており、それに伴う何らかの地下施設であった可能性が考えられる。



**第4号遺構** (第10図)

**位置・重複関係等** 第10トレンチで確認された。確認面はⅡa層上面である。切り合い関係は現況においては認められない。本遺構はローム上面でのプラン確認に止めており、掘削はしていない。

**形態** 本遺構は北側と西側が調査区外に延びており、且つ上面プランのみの情報となるが、平面形は隅丸方形を呈する。断面は不明。規模は現況で長軸108cm×短軸54cm。主軸方位は不明。

**覆土** 掘削をしていないため不明。

**遺物** 肥前産刷毛目碗が1点出土している(第4表)。

**時期** Ⅱ層面から掘り込まれていることから、近代。

**遺構の性格** 不明。あえて推測するならば、明治以降、墳丘西側一帯には木造の人家が建っており、それに伴う何らかの地下施設であった可能性が考えられる。

**第5号遺構** (第10図)

**位置・重複関係等** 第10トレンチで確認された。確認面はⅡ層上面である。切り合い関係はない。同様の性格を有する第6号遺構が6cm隣で検出されている。

**形態** 平面形は円形を呈する。瓦質の火消壺が蓋をした状態で正位で検出された。掘形は火消壺のサイズにあわせて構築されており、意図的に埋納されたことは疑いない。規模は直径約22cm。

**覆土** 調査中のアクシデントのため、掘形の記録をとることが叶わなかった。

**遺物** 本遺構で出土したのは火消壺(蓋を含む)1点のみである。壺の中は6分目あたりまで土が入っていたが、土の中は周囲の土質と明らかに違い砂質であった。また、壺内の土の中からは腐食した繊維(麻布か)が混じって認められている。

**時期** Ⅱ層上面であることから、近代以降。

**遺構の性格** 火消壺埋納土坑。内容物が腐食しており、何が埋納されていたのかは定かではないが、明治以降、墳丘西側一帯には木造の人家が建っていたことや、近世遺跡における同様の埋納遺構の性格を考慮すると、火消壺を転用した胞衣埋納遺構である可能性が高い。胞衣は麻布や紙にくるんで埋納されるという伝承や、水戸藩では火消壺を胞衣埋納容器に用いた記録があり(中村1999)、火消壺の中から麻布らしき繊維が認められたことも、胞衣埋納遺構の性格づけを補強する要素となろう。

**第6号遺構** (第10図)

**位置・重複関係等** 第10トレンチで確認された。確認面はⅡ層上面である。切り合い関係はない。同様の性格を有する第5号遺構が6cm隣で検出されている。

**形態** 平面形は円形を呈する。土師質の火消壺が検出された。土圧のため崩れてはいるが、正位で埋納されたことは間違いない。規模は直径約22cm。

**覆土** 5号遺構に同じ。

**遺物** 本遺構で出土したのは火消壺1点のみである。壺の中は土が入っていたが、土の中は周囲の土質と明らかに違い砂質であった。また、壺内の土の中からは腐食した繊維が混じって認められている。

以上は5号遺構のそれと同一の状況であるが、火消壺のサイズが本遺構のほうがひとまわり大きいこと、5号遺構火消壺が瓦質であるのに対し6号遺構出土火消壺が土師質であること、などの違いが認められる。

**時期** II層上面であることから、近代以降。

**遺構の性格** 5号遺構と同様の理由から、火消壺を転用した胞衣埋納遺構である可能性が高い。5号遺構と6号遺構が並んで検出されたことについては、建物内においてこの場所が胞衣埋納にふさわしい場所であったことを示している。5号・6号遺構には切り合いがないため、時期差について確証はないが、火消壺に差違が認められることから、多少なりとも埋納時期に差があったのではないかと推測される。

胞衣埋納遺構は水戸市において初めての検出事例である（恐らく茨城県内においても数少ない事例となろう）。水戸市域の人生儀礼において胞衣がどのように扱われ、どのように埋納されたのかについては、民俗学を含め明らかになっていない点が多い。かかる中で胞衣埋納遺構が検出された意義は少なくないものと思われる。とくに埋納容器が火消壺であった点は興味深い。周知のように江戸遺跡では土師質の大カワラケもしくは専用容器を合わせ口にして埋納するのが通例であるが、筆者が市内遺跡の試掘・確認調査で確認した限り、水戸市内（旧水戸城下城を含む）では大カワラケは出土していない。江戸遺跡以外の他の都市同様、大カワラケを生産・使用することは稀であったと考えられ、その中で胞衣埋納容器として選択されたのが火消壺だったのであろうか。いずれにしても、5号・6号遺構を皮切りにして、今後も同様の事例を注意深く蓄積していくことにより、今は失われた水戸市域の人生儀礼の一端を解明できれば、その意義は大と言えらう。（関口）

## 第6節 出土した遺物

(第13図～第14図、第3表、第4表、写真図版6～写真図版7)

本節では、第3次調査において出土した遺物について通覧する。これらの遺物の内訳については、第4表の出土遺物一覧表にて明記した。第4表における出土遺物のカウントの目的と方法については、『吉田古墳1』59頁を参照頂きたい。

### 第1項 古墳時代以前の遺物

**先土器時代の遺物** 本調査は史跡整備に伴う調査であるため、地山である関東ロームは一切掘削していない。従って、当該期の土地利用の痕跡は確認できなかった。また、表土・攪乱・周溝等からも、当該期の遺物は出土していない。

**縄文時代の遺物** 第2次発掘調査では第7トレンチの攪乱内からホルンフェルス製の分銅形打製石斧が1点出土しているが(水戸市教育委員会2006)、この度の調査では当該期の遺物は確認されていない。

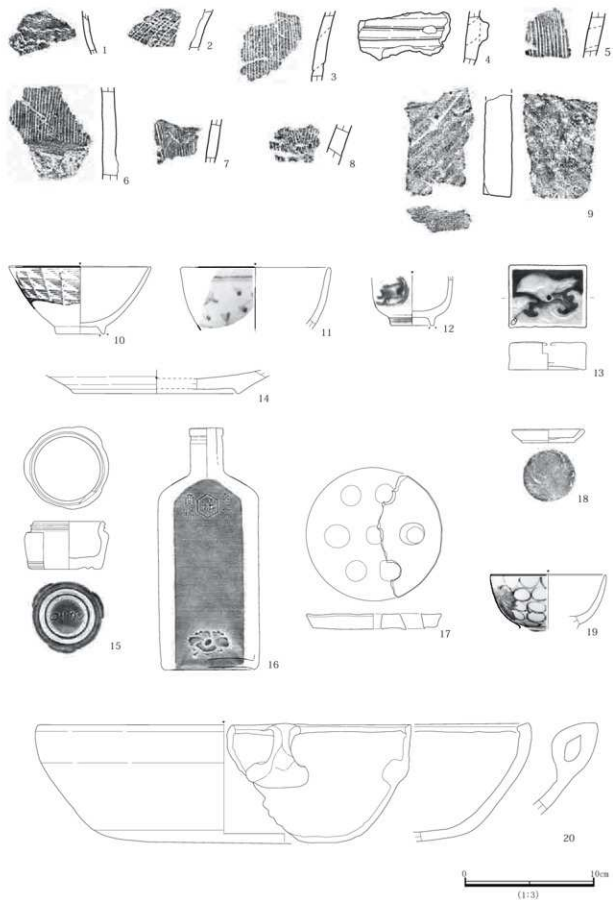
**弥生時代の遺物** 第2次発掘調査では第8トレンチ表土および第9トレンチ表土から弥生時代後期の付加条縄文第1種が施された胴部破片が出土しているが、今回の調査では第11トレンチから16点、第12トレンチから1点、1号遺構から1点の計18点が出土している(第4表)。概して十王台式土器を主体とする。うち2点を第13図1・2に図示した。1は頸部の破片とみられ、3本の櫛歯状工具により波状文が描かれている。2は胴部に付加条縄文第2種が施文されている。当遺跡の至近に位置する葉王院東遺跡では弥生時代後期十王台式期の集落が検出されており、当該地域にも土地利用が展開していたことを窺わせる資料と言えよう。

### 第2項 古墳時代～奈良・平安時代の遺物

**古墳時代の遺物** 破片8点が出土している(第4表)。全て第11トレンチからの出土で、器種は埴輪が7点、土師器高台坏1点である。うち円筒埴輪片6点を図示した(第13図3～8)。いずれも胴部破片であり、4を除きいずれも外面に縦方向の刷毛目がみられる。4は凸帯を残しているのに対し、6は下半に凸帯が剥落した痕跡がみられる。

第1号墳の造営年代は7世紀中葉と推定されていることから(『吉田古墳1』)、これらの埴輪はいずれも第1号墳に伴うものではない。資料はいずれも小破片でありその年代について推定するのが困難であるが、土浦市立博物館の塩谷修氏の御教示によれば、4は凸帯の形状の特徴から6世紀前半頃に位置づけられる可能性があるという。また4・5・6については、胎土に赤色粒子(石榴石か)を含むことから、茨城町小幡北山埴輪窯の製品である可能性はあるが、3・8については、ひたちなか市馬渡埴輪窯の製品であるのか、茨城町小幡北山埴輪窯の製品であるのか識別は出来なかった。

また、興味深いのは3～6・8がいずれも胎土に白雲母を含まず、長石や石英、赤色粒子から構成されるのに対し、7のみ白雲母を多量に含んでいる点である。



第13図 第3図次調査出土遺物（1）

白雲母を胎土に多量に含む特徴は、吉田古墳の近隣に営まれているひたちなか市馬波埴輪製作跡や茨城町小幡北山埴輪窯の埴輪には見られないもので、常陸太田市元太山埴輪窯の埴輪や県南地域の筑波山周辺の埴輪に見られる特徴である。7の胎土については、常陸太田市元太山埴輪窯の資料を実見された、ひたちなか市文化・スポーツ振興公社の鈴木素行氏に実見して頂いた結果、県央地域の埴輪の胎土とは明らかに異なっているとのことであり、むしろ県南地域の筑波山周辺の埴輪と酷似している特徴があるとの御教示を頂戴した。また7を塩谷修氏および小美玉市立史料館の本田信之氏に実見頂いたところ、胎土・内面調整ともに筑波山周辺の埴輪との類似性が指摘できるとの御教示を頂戴した。従って、6については筑波山周辺の埴輪製作跡から供給されている可能性が高い。

これまで筑波山周辺で生産されたとみられる胎土に白雲母を含む埴輪が、水戸周辺の古墳に供給されている例は全く知られていなかったことから、大変重要な資料と言えよう。

いずれにしても、第2次調査でも墳丘の東側に設定したトレンチのみから円筒埴輪片が出土することから、第1号墳のさらに東に未確認の6世紀前半代の埴輪を樹立する古墳が存在している可能性が高いことを指摘しておく。

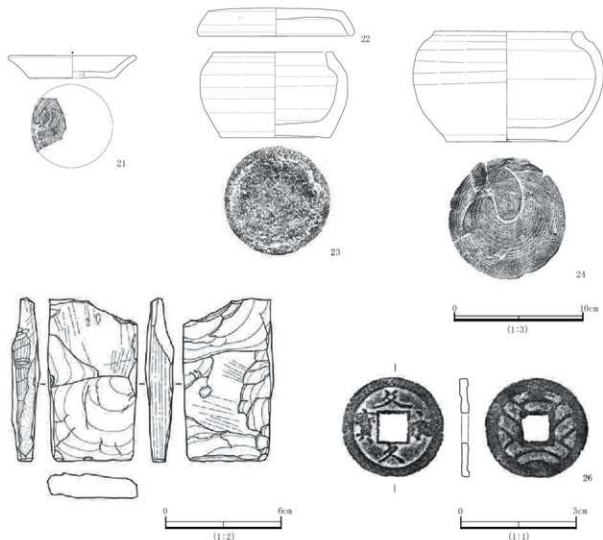
**奈良・平安時代の遺物** 破片21点が出土している。内訳は第11トレンチで14点、第12トレンチで6点、3号遺構で1点で、大半は墳丘東側からの出土である。器種は土師器17点、須恵器3点、瓦1点で、うち平瓦1点を図示した(第13図9)。小破片であるため、全容が窺えるものではないが、凹面に布目圧痕と糸切り痕が、凸面に糸切り痕が残されているものである。この特徴を持つ平瓦は、市内の渡里町に所在する台渡里廃寺跡長者山地区(古代常陸国那賀郡衛正倉院)から多数出土している。台渡里廃寺跡長者山地区からは、瓦葺の正倉とみられる礎石建物が多数確認されている。9の来歴は、それらの屋瓦の修復・差し替えに伴い生じた廃棄物などが奈良・平安時代の集落に持ち込まれ、カマドの構築材等に転用されたものが、最終的に廃棄されたものであろう。同様の瓦は同じ元吉田台地に位置する大鋸町遺跡第1地点の第7号住居跡からも出土している(水戸市大鋸町遺跡発掘調査会1988)。

(川口・関口)

### 第3項 中世～近・現代の遺物

**中世の遺物** 第12トレンチ表土から内耳土鍋が1点出土しているのみである(第4表、第13図20)。第2次調査でも中世遺物の出土はなく、総じて1号墳周辺での土地利用は低調であったように感じられる。しかしながら第2章第3節で述べたように、吉田台地と上市台地一帯は、中世以降、県央地区の政治・経済で重きをなした地域であり、古墳「群」内での土地利用は相当に活発であったと考えたほうが自然と判断される。

**近世の遺物** 破片44点、個体8点の計52点が出土している(第4表)。うち9点を図示した(第13図11～14・18・19、第14図21・25・26)。総じて18世紀後半以降の資料が多いが、志野織部皿B(1600年代～1670年代、第13図14)など17世紀にかかる資料も散見される。産地は磁器については肥前が多い。そのなかで11の梅樹文鉢や、図示はしなかったものの七面焼の碗(第12トレンチ№1)など、在地産の磁器も出土している。土器の出土率が最も多いが、産地等については調査・研究が進んでいないため、不



第14図 第3次調査出土遺物(2)

明な点が多い。

いずれにせよ近世の遺物は本遺跡の出土遺物の約3割を占めており、第1号墳周辺における当該期の活発な土地利用を窺わせるに十分な資料と言えよう。

**近代～現代の遺物** 破片が19点、個体9点の計28点が出土している(第4表)。第10トレンチの表土・攪乱からの出土が23点と大半を占める。とくに磁器および硝子製品が顕著である。うち6点を図示した(第13図10・15・16、第14図22～24)。22～24の火消壺は袍衣埋納容器に転用されていたものである。ほか残存率が悪く図示はしていないが、第10トレンチ表土出土のコバルト染付碗の中の1点の見込みに「…乾物…商店…藤柄町」(…は欠損部分)という文字が認められ、藤柄町内の乾物屋が発注元となり製作されたものであることが窺える。当該期にはこの地に造り酒屋が営まれており(現在の明利酒類株式会社)、今次調査で得られた近代から現代の多様な資料にみられるように、近隣町内の様々な生活用品が往来することは十分理解できる。

(関口)

第3表 出土遺物観察表

( ) は復元値, [ ] は残存値

図版番号	番号	出土地点	種別・器種	部位・残存値	法量 (cm)			重量 (g)	技法・文様・胎土・色調・焼成等	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
	1	第11トレンチ Fott №4	弥生土器・壺 十王台式	胴部・破片	—	—	[2.8]	9	シズ+付加条第2種R×L/色調内・外面: におい黄橙 (10YR7/4) / 焼成良好		弥生時代後期後半~古墳時代前期	
	2	第11トレンチ Fott №31	弥生土器・壺 十王台式	胴部・破片	—	—	[3.4]	10	櫛面状工具3本による波状文/色調外面: におい黄褐 (10YR5/3), 内面: におい黄 (2.5Y6/4) / 焼成普通		弥生時代後期後半~古墳時代前期	
	3	第11トレンチ Fott №2・12・13	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	[5.4]	28	外面: 縦方向のハケ目, 内面: 横方向のハケ目/胎土: 長石, 石英多量, チャート粒微量含む/色調外面: におい黄褐 (10YR5/4), 内面: 明褐 (7.5YR5/6) / 焼成良好		古墳時代後期	
	4	第11トレンチ Fott №4	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	[4.4]	48	外面: 低い凸帯, 凸帯付近は横方向のナデ, 内面: 輪積み痕/胎土: 長石, 石英多量, 赤色粒子微量含む/色調: 外面: におい黄橙 (10YR6/4), 内面: におい黄橙 (10YR6/4) / 焼成普通		古墳時代後期	
	5	第11トレンチ Fott №5	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	[3.6]	21	外面縦方向のハケ目, 内面は指ナデ/胎土: 長石, 石英多量, 赤色粒子微量含む/色調外面: におい黄橙 (10YR7/4), 内面: 橙 (7.5YR7/6) / 焼成普通		古墳時代後期	
13	6	第11トレンチ Fott №6	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	[7.2]	66	外面: 縦・斜め方向のハケ目, 凸帯割, 内面: 縦方向の指ナデ/胎土: 長石, 石英多量, 赤色粒子微量含む/色調外面: におい褐 (7.5YR5/4), 内面: 橙 (7.5YR6/6) / 焼成普通		古墳時代後期	
	7	第11トレンチ Fott №8	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	[3.4]	14	外面: 縦方向のハケ目, 内面: 指ナデ/胎土: 長石, 石英, 雲母多量含む/色調: 内・外面: におい橙 (7.5YR6/4) / 焼成普通	元太田山埴輪窯か	古墳時代後期	
	8	第11トレンチ Fott №9	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	[3.2]	22	外面: 縦・斜め方向のハケ目, 内面は指ナデ/胎土: 長石, 石英多量含む/色調外面: におい黄橙 (10YR6/3), 内面: におい黄橙 (10YR6/4) / 焼成普通		古墳時代後期	
	9	第11トレンチ Fott №17	瓦・平瓦	広縁部・破片	—	—	[8.0]	164	凹面: 春日糸切り痕, 凸面: 糸切り痕/胎土: 長石, 石英多く含む/色調外面: 灰黄 (2.5Y7/2), 内面: 灰オリーブ (5Y6/2) / 焼成良好		8世紀前葉	
	10	第10トレンチ 表土一括	磁器・碗 「飯椀」	口縁部~底部 1/2以上	(11.4)	4.0	5.4	103	轆轤成形/ゴム版給付, 畳付無軸, 砂付着, 外面三角形の連続文	不明	1920年代~1940年代後期	
	11	第10トレンチ 表土一括	磁器・鉢	口縁部~体部, 破片	(120)	—	[5.0]	22	轆轤成形/染付/外面口縁部二重園線, 体部梅樹文/貫入あり	在地産	19世紀以降	
	12	第10トレンチ 表土一括	磁器・碗 湯呑碗	体部~高台部 1/2以下	—	3.4	[3.8]	25	轆轤成形/染付/畳付無軸・砂付着, 外面体部文様あり, 腰部二重園線, 高台部一重園線, 高台部二重園線	肥前	1810年代以降	
	13	第10トレンチ 表土一括	磁器・水漬	完形	長 6.3	短 5.0	2.1	65	板作型押し成形/表面中央と下方隅に穿孔/染付/外面無軸面1面・布目1面, 表面陶割で波に動	瀬戸・美濃	1810年代~1860年代	

( )は復元値、[ ]は残存値

図版番号	番号	出土地点	種別・器種	部位・残存値	法量 (cm)			重量 (g)	技法・文様・胎土・色調・焼成等	推定生産地	推定年代	備考
					口径	底径	器高					
13	14	第10トレンチ表土一括	陶器・皿 志野織部 皿Bか	底部、破片	—	(128)	[19]	62	轆轤成形、削出高台/灰釉、高台内外無釉、見込み目痕残存/買入あり	瀬戸・美濃	1600年代～1670年代	
	15	第10トレンチ表土一括	ガラス製品 水容器	ほぼ完形	5.4	5.6	3.8	135	乳白色・不透明/気泡あり/回転キャップ/底裏に陽刻「ロリガン」		1905年以降	
	16	第10トレンチ表土一括	ガラス製品 瓶	完形	192	7.7	2.8	321	無色透明/気泡あり/王冠栓/体部上面に陽刻「登録商標」六角形区画内に「昇」・同下部に花卉陽刻			
	17	第10トレンチ表土一括	土器・さな	1/2以下	上面径(106)	底面径(100)	1.2	47	型打成形/焼成前穿孔残存4			上面被熱
	18	第12トレンチ表土一括	土器 小カワラケ	完形	5.6	4.1	1.05	16	轆轤成形、見込み凹む、糸切底(右)/胎土:長石、石英、雲母、赤色粒子微量含む/色調内外面:にぶい黄橙(10YR7/4)/焼成良好	在地産	近世以降	
	19	第12トレンチ表土一括	磁器・碗 丸碗C	口縁部～体部、1/2以下	(96)	—	[4.3]	29	轆轤成形/染付/外面「雪輪文」・コンニャク印判刺文、高台輪一重圓線、高台部一重圓線	肥前	1730年代～1770年代	
14	20	第12トレンチ表土一括	土器(瓦質) 内耳土鍋	口縁部～底部、1/2以下	(390)	(9.3)	9.4	248	紐積み成形/体部外面横ナデ、内面・内底部横ハケ/内耳貼付1/胎土:長石、石英微量含む/色調:灰(5Y4/1)/外面煤付着	在地産	中世後期	
	21	3号遺構	土器 中カワラケ	口縁部～底部、1/2以下	(100)	(6.6)	1.8	15	轆轤成形、糸切底(右)/胎土:長石、赤色粒子、チャート微量含む/色調内外面:橙(7.5YR6/6)/焼成良好	在地産	近世	
	22	5号遺構	土器(瓦質) 火消壺	1/2以上	上面径10.4	受部径12.2	2.2	117	上面型打後受部轆轤成形/上面砂目、受部外面ヘラケズリ・同内面ヨコナデ/胎土:長石、石英含む/色調内・外面:灰(5Y5/1)/焼成良好	在地産	近代以降	脇衣埋納容器に転用
	23	5号遺構	土器(瓦質) 火消壺	完形	9.3	8.6	6.8	406	紐積み成形/内・外面ヨコナデ、外面底部砂目/胎土:長石、石英含む/色調内・外面:灰(5Y5/1)/焼成良好	在地産	近代以降	脇衣埋納容器に転用
	24	6号遺構	土器 火消壺	ほぼ完形	11.5	9.5	8.8	577	轆轤成形/内面ヨコナデ、外面ヨコナデ、糸切底(左)/胎土:長石、石英含む/色調外面:オリーブ黒(5Y3/1)～にぶい黄橙(10YR6/3)、内面:オリーブ黒(5Y3/1)/焼成良好	在地産	近代以降	脇衣埋納容器に転用
	25	3号遺構	石製品 砥石	ほぼ完形	長8.6	幅4.8	厚1.5	80	砥面4面/擦痕・線状痕あり/泥岩	不明	近世	
	26	表面採集1号墳増正	文入水宝(銅四文鏡)	完形	外径26	穿径0.7	0.12	3	緑青付着/真書/背面11波	江戸深川	初鋳年:1863年	



第4表 出土遺物一覧表

出土地点	出土遺物	縄文		弥生		古墳		奈・平		中世		近世		近・現代		不明		総計	
		破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計	破片	小計		
第10トレンチ	ローム上面	土器	カワラケ	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	
		肥前 厚手碗X	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1		
	表土	磁器	肥前 半球碗C	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	
			肥前 小环	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	
			肥前 湯呑碗	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	
			瀬戸・美濃 水滴	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	
			在地産 鉢	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	
			コバルト染付碗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	2	2	
			型紙絵付碗	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	2	2	
			銅板絵付碗	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	
			ゴム版絵付碗	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	
			近代 湯呑碗	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	
		磁製品	磚子	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	
			陶器	瀬戸・美濃 志野織部皿	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1
		瀬戸・美濃 搦鉢X		0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	
		皿		0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	0	0	0	5	5	
		土器	火消壺	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	
			さな	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	
			土器片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	
			香水瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	
	化粧クリーム瓶		0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	3	3		
	硝子	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1		
		石製品	円盤状製品	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1		
	攪乱	磁器	肥前 丸碗C	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	
			瀬戸・美濃 碗	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	
		徳利か	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1		
		土器	小カワラケ	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2	2	
			鉢 瓦質	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	
			壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	2	2	
	土器片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	0	7	7			
	第11トレンチ	No1	土師器	坏	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
		No2+12+13+19	埴輪	円筒埴輪	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
No3		土師器	坏	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
No4		埴輪	円筒埴輪	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No5		埴輪	円筒埴輪	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No6		埴輪	円筒埴輪 雲母含む	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No7		土器	胴部 弥生中期～後期	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No8		埴輪	円筒埴輪	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No9		石	礎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1		
No10		須恵器	平安	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No11		土器	胴部 弥生中期～後期	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No14		土器	胴部 十王台式	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No15		土師器	高台坏	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No16		土器	胴部 弥生中期～後期	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No17		瓦	平瓦	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No18		土師器	坏	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No20		石	板状	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1		
No21		土師器	坏	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No22		土師器	坏	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No23		須恵器	飯類 頸部 木葉下	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
No24		土器	胴部 弥生中期～後期	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No25		土師器	常盤甕 底部	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
		土器	胴上部 十王台式	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No26		土師器	甕類	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No27		土器	胴上部 十王台式	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
No28		土師器	甕類	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1		

出土地点	出土遺物	縄文		弥生		古墳		奈・平		中世		近世		近・現代		不明		総計					
		破片 個体	小計	破片 個体	小計	破片 個体	小計	破片 個体	小計	破片 個体	小計	破片 個体	小計	破片 個体	小計	破片 個体	小計						
第11トレンチ	No.29 埴輪 円筒埴輪 雲母なし	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1					
	No.30 土師器 甕類	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
	No.31 土師器 須部 十王台式	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
	No.32 土師器 坏	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
	No.33 土師器 胴部 弥生土器か	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
	No.34 土師器 胴部 弥生土器か	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
	No.35 石 産	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1					
	No.36 土師器 袋物	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1					
	No.37 土師器 胴下部 十王台式	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
	No.38 土師器 胴部 弥生中期～後期	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
	No.39 埴輪 円筒埴輪 雲母なし	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
	周溝覆土	磁器	瀬戸・美濃 器種不明	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	1				
			京・信楽 半球碗	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1				
			在地産 碗	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1				
土器		胴上部 十王台式	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4					
		カワラケ	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	4					
土器片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	10							
表土	土器	釜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	0	0	5	5						
	土師器	瓦質板状製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1						
第12トレンチ	No.1 陶器 七面焼 碗	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1						
	No.2 石 円礫 安山岩系	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1						
	No.3 土師器 土師器片	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1						
	No.4 土師器 土師器片	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1						
	No.5 土師器 土師器片	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1						
	No.6 土師器 土師器片	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1						
	No.7 土師器 土師器片	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1						
	No.8 土師器 土師器片	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1						
	表土	磁器	肥前 丸碗C	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1					
			肥前 半球碗X	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1					
		陶器	瀬戸・美濃 鉢	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1					
			胴部 弥生中～後期	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1					
		土器	小カワラケ 右回転	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1					
			内耳鍋 瓦質	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1					
丸火鉢 土師質	0		0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1							
土器片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1								
1号遺構	磁器	在地産か 碗	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1						
		産地不明 袋物	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1						
		カワラケ 右回転	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	2						
	土器	カワラケ	0	0	0	0	0	0	0	9	9	0	0	0	0	0	9						
		丸火鉢 瓦質	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	2						
土器片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5	5	5								
2号遺構	磁器	在地産 碗	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1						
	土器	底部 弥生中～後期	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1						
土器片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2								
3号遺構	須恵器	坏	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1						
		肥前 丸碗X	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1						
	土器	カワラケ 右回転	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	2						
		カワラケ	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	2						
		土器片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1						
瓦質土器片	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1								
石製品	砥石	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1							
4号遺構	陶器	肥前 刷毛目碗	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1						
5号遺構	土器	火消壺 瓦質	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1						
		火消壺蓋 瓦質	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1						
6号遺構	土器	火消壺 土師質	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1							
表面採集	銭貨	文久水宝	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1						
総計		0	0	18	18	8	8	21	0	21	1	0	1	44	8	52	19	9	28	36	1	37	165

## 第V章 吉田古墳と八角形墳

### 第1節 問題の所在

かねてより方墳と目されてきた吉田古墳は、平成17年度に実施した第2次調査によりその可能性が否定されたものの、墳形は不確定のままであった（『吉田古墳1』）。これを受け、今次調査は墳形を明らかにすることを調査目的の一つに挙げてきたが、調査の結果、吉田古墳の周溝が八角形を呈する可能性が高まってきた。

常陸の古墳で八角形墳はこれまで確認されておらず、さらに石室に装飾を有する八角形墳はわずかに梶山古墳（鳥取市）を挙げるのみである。吉田古墳が八角形墳か否かという議論は、その希少性のみならず、古代常陸国の成立についても少なからぬ意義を有するものと判断される。

小考はかかる問題意識のもと、全国の八角形墳の調査・研究史をまとめた上で吉田古墳の墳形をめぐる調査担当者としての見解を提示し、今後の議論の叩き台とするとともに、本報告を総括するものである。

### 第2節 八角形墳調査・研究史抄

吉田古墳の墳形を論ずるに際し、まず八角形墳の調査事例（確定していない事例も含む。否、八角形墳は確定していない事例のほうが多いのが特徴である）とその評価についての研究動向を確認し、それをふまえた上で墳形を検討するのが順当と思われる。しかし意外な事に、八角形墳の調査・研究史をまとめた先行研究は少なく、特に2000年代に入ってからには管見の限り見あたらない。そこで本節ではやや冗長になるが、八角形墳の調査・研究史を年代順にまとめることとしたい。

**1970年代の調査・研究動向** 八角形墳を主体的に扱った研究は1870年代から始まると言ってよく、古墳の調査・研究史に比べれば浅いものである。もっとも、八角形墳の存在は古くから知られており、文暦2（1235）年『阿不幾乃山陵記』における大内陵（天武・持統天皇合葬陵、明日香村・野口王墓古墳に比定）が「形八角」とあるという記事はよく知られている。

この野口王墓古墳と、同じく八角形墳である御廟野古墳（京都市山科区、天智天皇陵）をもとに、八角形墳の造営思想を分析したのが菅谷文則氏である。菅谷氏は八角形墳の思想的背景を仏教、具体的には8世紀に造営される仏堂である八角円堂に求めた（菅谷1973）。そして7世紀後半より天皇陵のみに八角形墳が採用される理由を「天皇の遺骸そのものを、仏舎利的に理解していた」とする。「八角円堂」と呼ぶように、八角堂は円堂すなわちストゥーパを源流としているので、八角形墳もまたストゥーパとしての性格を具備させていた、というのである。八角形墳は野口王墓古墳と御廟野古墳しか認めら

れていなかった当時において、八角形墳の思想的背景を仏教に求めた氏の学説は広く支持されてゆくこととなる。

昭和49(1974)年、明日香村中尾山古墳(文武陵)において整備のための発掘調査が実施され、その結果列石が八角形を呈することが明かとなった(明日香村教育委員会1975)。八角形墳が発掘調査によって実証されたのは本事例を嚆矢とする。そして中尾山古墳の発掘調査を契機として、八角形墳＝仏教思想説を否定する見解が網干善教氏により提示された(網干1979)。

網干氏は『旧唐書』『大唐郊祀録』の記述を具体的に引用しながら、中国では後周以来、皇帝は祭祀にあたって八角方壇を制度として用いてきたことを強調し、「古墳における八角形の外形を、中国の制度のなかに求め、これの影響をうけて、八角方壇の築成が行われたのではないか」と提起された。そしてその思想的背景は中国儒教にあり、菅谷氏の述べる仏教思想も、中国儒教に源流を求めるべきものとして、究極的には儒教思想に包括されるべきと主張されたのである。

70年代における菅谷氏の仏教源流説と網干氏の儒教源流説は、あくまでも天皇陵に限定された主張ではあったが(当時まだ天皇陵以外で八角形墳は認められていなかった)、以後現在に至るまで、基本的には両氏の説が主軸となり、八角形墳造営の思想的背景をめぐる議論は展開していくこととなる。

**1980年代の調査・研究動向** 昭和57(1982)年、白石太一郎氏は八角形墳の出現と展開の背景をめぐる論考を発表した(白石1982)。白石氏は野口王墓古墳・御廟野古墳・中尾山古墳のほか桜井市の壇ノ塚古墳(舒明天皇陵)の4陵を确实な八角形墳と認め、更に明日香村の牽牛子塚古墳と岩屋山古墳も八角形墳である可能性が高いとした。白石氏は岩屋山古墳の被葬者を斉明天皇と想定した上で「現在知られているほぼ确实な八角形墳がすべて即位の大王(天皇)陵であることが相当の確実性をもって推定され(中略)この7世紀中葉から8世紀初頭に至る時期の大王陵は八角形墳であったことを示すものと考えべき」とした。そして大王が八角形というこれまでにない墳形を採用した理由として「大王を諸豪族から隔絶した地位におくとともに、大王を中心とする中国風の中央集権国家の樹立」するための表徴であったと述べた。更にその思想的背景として、網干氏の説を是とし、広義の中国政治思想の影響を八角形墳に見出したのである。白石氏の所論により、天皇陵の八角形墳をめぐる基本的な議論は出揃った感があるが、その後数年を経ない内に、天皇陵以外にも八角形墳の可能性を有する事例が複数提示されるようになる。

なかでも宝塚市中山荘園古墳と福山市尾市1号墳は、地方の八角形墳の調査事例の先駆をなすものである。中山荘園古墳は、前庭部にテラスを築いていることから正八角形墳ではないものの、外護列石は内角135°という正八角形墳の規格に極めて近く、八角形を意図して築造されたことは疑いが無い。石室形態から7世紀第2四半期と推定されている(宝塚市教育委員会1985)。

また尾市1号墳は平面プランが十字形をした特異な石室を有する古墳として従来知られていたが、調査の結果外護列石が八角形(正八角形ではない)をめぐる可能性が高まった(新市町教育委員会1985)。保存目的の調査のためトレンチは十全ではないため確実とは言えないが、八角形プランを指向していたことは明かである。

さらに84年には高取町東明神古墳の発掘調査が実施され、八角形墳の可能性が指摘されている(河

上1986)。掘込地業が八角形を呈していることを根拠としたものであるが、推定プランは正八角形ではなくいびつである。また掘込地業と墳丘それぞれの推定八角形プランにずれが生じている点が当初から疑問点として提示されており、八角形墳の認定に際してはいくつかの課題を孕んだまま現在に至っている。

これらの八角形墳の事例増加とともに、当時東日本における唯一の調査事例であった高崎市一本杉古墳が類例としてしばしば取り上げられるようになった。一本杉古墳の調査は1960年に実施され、概要報告が出されていたところであったが、八角形墳としての検討材料が詳らかに提示されるのは90年代まで待たねばならなかった(梅澤1997)。

いずれにせよ80年代は、正八角形ではない八角形墳、天皇陵以外の八角形墳が提示された時期であったため、従来の定説では説明が十分でなく、改めて八角形墳の意味するところを考えることが要請された。これにいち早く応えたのが直宮憲一氏である。直宮氏はこれまでの研究や調査事例を俯瞰した上で、八角形墳の思想的背景には、陰陽道や風水思想に基づく八方位の意識があるとした(直宮1988)。すなわち「死者の霊を最良の八卦に導こうとする所作が八方位を示す八角墳を生むことになり、それが転じて「道教でいうところの神仙としての道、すなわち天帝の道と進んで」いった結果、天皇陵に八角形墳が採用されたという展開過程を提示されたのである。これはさきの網干氏の所論と似ているが、網干氏が中国の制度としての八角形を第一義的に強調したのに対し、直宮氏は思想としての八方位の意識を第一義と捉えたところに特徴があり、網干・白石氏らの唱えた天皇陵の八角形墳の展開の思想的背景と上手く整合している。直宮氏の所論は7世紀前半の八角形墳、そして地方の八角形墳の意味を考える上で重要かつ説得力のあるものとして現在でも精彩を放っている。

**1990年代の調査・研究動向** 90年代は八角形墳の調査事例が各地で報告される時期である。1991・96年には多摩市稲荷塚古墳(多摩市教育委員会1987・1986・1996)、94年には鳥取市観山古墳(国府町教育委員会1994・1997)、95年には笛吹市経塚古墳(山梨県埋蔵文化財センター1995)、96年には吉岡町三津屋古墳(吉岡町教育委員会1996)が報告された。また97年には『月刊考古学ジャーナル』誌上に「東日本の八角形墳」と題する特集が組まれ、前出の稲荷塚古墳(桐生1997)・経塚古墳(吉岡1997)・三津屋古墳(濵野1997)とともに、既調査ながら詳細が明かとなっていなかった藤岡市伊勢塚古墳(志村1997)・高崎市一本杉古墳(梅澤1997)・桐生市武井庵寺塔跡(平野1997)の事例も報告されるなど、地方の八角形墳が一挙に増加したのである。

これらの地方の八角形墳の増加を受け、92年には脇坂光彦氏が、97年には小林利晴氏が論考をそれぞれ出している。両氏ともに畿内の八角形墳と地方の八角形墳とを性格の異なるものとして捉え、80年代の先学の考え方を踏襲している。

さて脇坂氏は畿内の八角形墳の思想的背景を網干・白石氏の提唱した中国の政治思想に求めたが、地方の八角形墳については「それぞれが多様な内容をもっているので、各古墳の成立背景の研究にはそれぞれの地域性を十分考慮せねばならないだろう。地方の古墳ということで、すべてを一律の視点でとらえようとするのは危険である」との見識を示された(脇坂1992)。まさに正論と言うべきであろう。また小林氏は外護列石・墳丘盛土・年代等の比較をした上で、地方の八角形墳の特徴として

- ・正八角形ではない、いびつな形状が多く、外護列石もバラバラに置かれること
- ・墳丘盛土は軟質で版築的な技法を採用していないこと
- ・築造年代が畿内の八角形墳に先行する7世紀初頭のものが多いこと

等の点を指摘し、「やはり畿内の八角形墳は地方の八角形墳に比べて、隔絶しているものと思われる」と結論づけた(小林1997)。

小林氏がまとめた地方の八角形墳の特徴は、裏を返せば地方の八角形墳とされるものに統一的な規格が認められないということであり、それが地方の八角形墳をして、八角形墳として認定できるか否かを困難なものにしている。

ただし、地方の八角形墳のなかで三津屋古墳のみは紛う事なき正八角形墳であることが発掘調査によって証明されている。三津屋古墳が他の地方の八角形墳とは構造的にも年代的にも背景を異にすることは、衆目が一致するところである。

**2000年代の調査・研究動向** 2000年代は90年代に比べると八角形墳の事例は落ち着きを見せ、それに呼応するかのように研究論文も減少気味である。そのような中でも右島和夫氏と今尾文昭氏の論考は注目すべきものとして挙げられよう。

右島氏は群馬県下で多角形墳の可能性のある事例(三津屋古墳を除く)を集成し、共通項として

- ・全体的に不定形で規格性に欠けるのみならず、各辺はゆるやかな弧状を呈し、角部も厳密に特定の一点に限定することが難しいこと
- ・葺石を伴うこと。これに関連して、葺石の供給地である西毛地域に分布が集中していること
- ・6世紀第4四半期を中心とした時期に限定されて築造されていること
- ・被葬者が特殊な地位・社会的背景に関わるものではなく、西毛地域における往時の一般の形状として認められるものであること

を指摘した(右島2001)。そしてこれらを総合的に判断して、多角形プランを意識して築造したものではなく、葺石による外郭の築造が単位作業の連続であるため、円墳を意図していても結果的に多角形を疑うようないびつな形状になってしまった、という理解を示された。その上で「これらの多角形墳を円墳の一形態として捉える方が、この種の古墳を取り巻く様々な条件を無理なく理解できるように思われる」ために、「八角形円墳」の用語を提唱した。

これまで地方の八角形墳を、いびつな形状とはいえ八角形墳として認識し、その意味を見出す議論が中心であった中、右島氏は円墳の一類形として捉えるべきとする真逆の理解を示された点で、ある意味衝撃的な見解であった。右島氏の見解が群馬県下だけでなくすべての地方八角形墳に敷衍されるかどうかはともかくとして、プランから安易に多角形墳に結びつけることの危うさや、多角形墳であることの根拠を示すことの難しさを改めて示すこととなった。右島氏の論考が発表されて以降、地方のいびつな八角形墳の認識に対して慎重論を唱える姿勢が増加した傾向にあるように見受けられ(例えば河上2003a)、かかる姿勢は多摩川中・下流域における終末期古墳の墳形をめぐる議論にも引き継がれている(新井2004)。

このように80年代以降、地方の八角形墳の増加に伴って、八角形墳をめぐる議論が展開されてきた

が、当然のことながら研究の軸足が地方に向き、畿内の八角形墳についてはしばらく等閑視されてきたくらいがあった。その中で今尾文昭氏は再び畿内の八角形墳に注目し、7世紀後半以後の陵墓の展開とその意味を考究している（今尾2005）。今尾氏は、舒明天皇から文武天皇までの全ての陵墓が八角形墳を採用しており（今尾氏は飯福寺北古墳を孝徳陵、岩屋山古墳と牽牛子塚古墳を斉明陵と推定している）、その中で野口王墓古墳（天武・持統合葬陵）の前後で類型が分かれることを指摘した。さらに野口王墓古墳を意識して藤原京の京域と条坊が設定されたことから、「7世紀中葉の舒明陵以降、採用されてきた八角形に込められた理念がここに都城計画と一体化することで、より高次元の形を表したものと理解される」と述べられている。今尾氏は八角形墳が天皇を中心とする中国風の中央集権国家の樹立のための表徴であったとする網干氏・白石氏の所論を踏まえつつ、それが都城計画にまで及んだことを指摘したのである。

八角形墳をめぐる調査と研究は1970年代より以上のように推移してきた。要約すれば中国の仏教思想に源流を求める菅谷氏の見解と、中国儒教を基調とした中央集権的祭祀制度に源流と求める網干氏・白石氏の見解と、それを肯定しつつその前段に八方位をして宇宙をあらわすものとする中国の陰陽道・道教思想に源流を求める直宮氏の見解が提出されてきている。現在は直宮氏の見解が多くの支持を集めているように見受けられるが、いずれにせよその源流を大陸に求める点では一致している。

一方で地方の正八角形ではない、多くのいびつな八角形墳については右島氏の論考以降は概して慎重論が強く、そもそも八角形墳と呼ぶべきものなのかどうか、という出発点の段階に立ち返った議論が多い。その影響があつてか、地方の八角形墳に対する積極的な論考は近年低調気味であるように見受けられる。

私見では脇坂氏が述べたように、地方の八角形墳はそれぞれの地域の政治的・社会的事情の中で成立してきたものであるから、地方の八角形墳を一括りにして議論するだけでは成立の意味を把握できないものと思われる。右島氏が群馬県域における「八角形円墳」の詳細な分析は、結論こそ八角形墳の造営意図を否定するものであったが、そのプロセスは十分積極的であり、説得力がある。しかしそれはあくまでも6世紀後半代に集中する西毛地域の古墳の事例であつて、それが地方の八角形墳すべてに敷衍されるものではないことは自明である。したがってことさらに慎重姿勢を取る必要はなく、右島氏がいい、今後も地域における古墳造営の趨勢の中で積極的な議論を図るべきものと考えられる。例えば多摩市稲荷塚古墳では、プランのみで考えると施工誤差が目立ち、その認定に疑問の声もあるもの（新井2004）、桐生直彦氏は和田古墳群を中心とする在地の群集墳の個別的分析の中で稲荷塚古墳の特異性を抽出し、「在地豪族たちの奥津城である群集墳よりも優位な存在である八角形墳に葬られたのは、後の国府の成立に少なからぬ影響を与えた人物」の奥津城として再評価している（桐生2002）。吉田古墳についても、かかる視点を持って評価していくことが肝要であろう。

以上の調査・研究史をふまえた上で、次節では第3次調査成果の総括とともに、墳形をめぐる考察を加えたい。

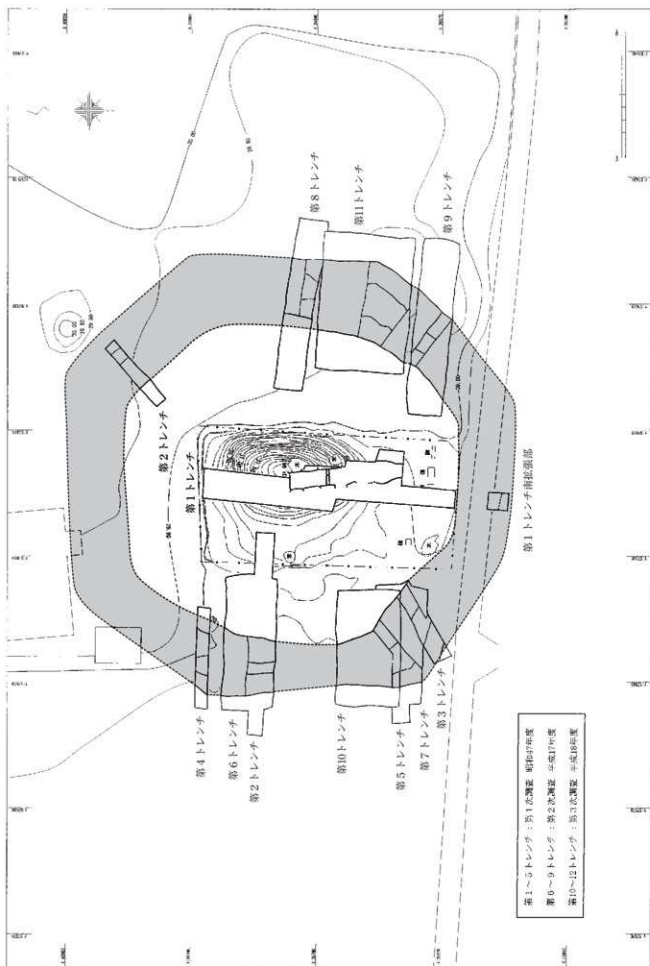
### 第3節 吉田古墳の墳形をめぐって

**周溝の形状について** まず今次調査までの成果をまとめてみよう。第1次調査から第3次調査まで、これまでに12本のトレンチ調査を実施しているが、それらをまとめたのが第15図である。墳丘北側および南側の周溝については不明確な点が多いものの、東側と西側についてはだいぶトレンチが充実してきたことになる。

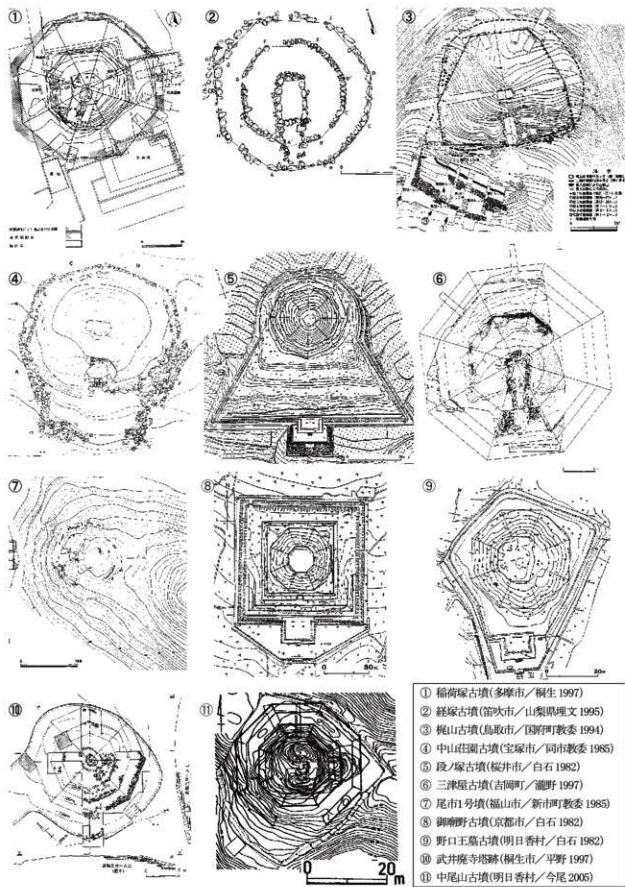
さて第15図を一見すれば明かなように、周溝の墳裾部および外堤部ともにプランは直線的である。墳丘西側は後世の整地によって確認面が低いとはいえ、このような直線的なプランをして円墳と判断するには躊躇せざるをえない。そう考えてゆくと、周溝の辺が交差するポイントが墳形判断の上で重要となってくるわけで、果たして第10トレンチ・第11トレンチでは稜角とみられるプランが検出されている。これが吉田古墳が多角形墳である可能性を示す根拠となっている。第10トレンチの稜角は $145^\circ$ 、第11トレンチの稜角は $150^\circ$ を計る。正六角形墳の角度が $120^\circ$ で、正八角形墳の角度が $135^\circ$ であることから、どちらかといえば八角形墳の角度に近い。ただし $10^\circ \sim 15^\circ$ ほどの歪みがあることも事実であり、これをどう捉えるかが問題となってくる。前節でみてきたように地方の多角形墳の大半にこのような歪みが認められることも事実である。この歪みを古墳の築造に伴う施工誤差（多摩市教育委員会1996）と考えること自体は、地方の八角形墳を肯定的に捉える研究者も否定的に捉える研究者も共通している。要は八角形を意図して誤差が生じたのか、円形を意図して誤差が生じたのか、という点が論点となるのである。

では吉田古墳の周溝が果たして円形・八角形のどちらを意図して施工されたのか、という点については、現段階では八角形を意図したものと考えざるをえないだろう。それは吉田古墳における施工誤差の判断根拠となるものが、外護列石ではなく周溝である点も考慮に入れなくてはならないからである。周知の通り一般的な古墳の造営に際しては一定の規格があり、とくに円墳の周溝構築の規格については、棒と縄を使用すれば正円プランを引くことは全く問題ないはずである。加えて吉田古墳は台地縁部からやや南側の標高30m台の安定した平坦地に占地されていることから、地形の起伏にともなう誤差等も考慮に入れる余地はない。右島氏が群馬県下の事例において円墳の施工誤差と捉えたのは葺石である。確かに葺石にせよ周溝にせよ古墳造営は単位作業の連続によって完成されるものであるから、多少の誤差は当然生じるであろう。とりわけ葺石による立体構造物を構築するにあたっては、ある程度の誤差は念頭に置かねばなるまい。しかし周溝という平面的な構造物で、第15図にみられるような直線の連続による「多角形円墳」が成立し得るものなのであろうか。しかも吉田古墳は石室に壁画を有し、墳裾部の対辺長が26m、外堤部の対辺長が35mを計るなど那珂川流域の古墳では中核クラスの規模を有し、在地の盟主の奥津城と目される古墳である。このような古墳の造営にあたり、円墳を意図しながら施工誤差によりびつなプランを生じさせたとする解釈はやはり無理があるのではなからうか。無論、八角形墳としての根拠も、わずかに2箇所の稜角を認めたのみであるから、吉田古墳を八角形墳と断定する論拠としては不十分ではあるが、現段階で得られた情報から総合すると、





第15図 第1～3次調査で検出された石室・周溝 (S=1/300)



- ① 稲荷塚古墳(多摩市/桐生 1997)
- ② 経塚古墳(笛吹市/山梨県埋文 1996)
- ③ 梶山古墳(島根市/国府町教委 1994)
- ④ 中山荘園古墳(宝塚市/同市教委 1985)
- ⑤ 段ノ塚古墳(桜井市/白石 1982)
- ⑥ 三津屋古墳(吉岡町/瀧野 1997)
- ⑦ 尾市1号墳(福山市/新市町教委 1985)
- ⑧ 御崎野古墳(京都市/白石 1982)
- ⑨ 野口王墓古墳(明日香村/白石 1982)
- ⑩ 武井庵寺塔跡(桐生市/平野 1997)
- ⑪ 中尾山古墳(明日香村/今尾 2005)

第16图 全国主要八角形墳

第5表 全国主要八角形墳一覧（築造年代順、推定を含む）

No.	古墳名	所在地	築造年代	規模 (対辺間)	文献	備考
1	伊勢塚古墳	群馬県藤岡市	6世紀末葉～7世紀初頭	27m	志村1997	
2	一本杉古墳	群馬県高崎市	7世紀第1四半期	22m	梅澤1997b	
3	稲荷塚古墳	東京都府中市	7世紀第1四半期	34m	多摩市教委1987・1991・1996、桐生1997・2002、小林1997	
4	梶山古墳	鳥取県鳥取市	7世紀第1四半期	17m	国府町教委1994・1997	
5	経塚古墳	山梨県笛吹市	7世紀前半	12m	山梨県埋文1995・吉岡1997	
6	中山荘園古墳	兵庫県宝塚市	7世紀第2四半期初頭	13m	宝塚市教委1985	
7	段ノ塚古墳	奈良県桜井市	7世紀第2四半期	42m	白石1982・今尾2005	舒明陵(643年移葬)
8	吉田古墳	茨城県水戸市	7世紀中葉	26m	水戸市教委2006・本報告書	
9	三津屋古墳	群馬県吉岡町	7世紀第3四半期	14.5m	吉岡町教委1996・瀧野1997	
10	尾市1号墳	広島県福山市	7世紀第3四半期	11m	新市町教1985	
11	岩屋山古墳	奈良県明日香村	7世紀第3四半期	22m	白石1982・今尾2005	齊明陵か(667年合葬)
12	御廟野古墳	京都府京都市	7世紀第3四半期	42m	白石1982・今尾2005	天智陵(671年崩御)
13	野口王墓古墳	奈良県明日香村	7世紀第4四半期	38m	白石1982・今尾2005	天武・持統陵(686年天武埋葬, 702年持統合葬)
14	幸牛子塚古墳	奈良県明日香村	7世紀第4四半期	16m	白石1982・今尾2005	齊明陵か(699年造営)
15	東明神古墳	奈良県高取町	7世紀後半	30m	河上1986・2003b	草壁皇子
16	龍原裏1号墳	埼玉県熊谷市	7世紀後半～8世紀初頭	—	—	
17	龍原裏2号墳	埼玉県熊谷市	7世紀後半～8世紀初頭	—	熊谷市龍原裏遺跡調査会2000	
18	龍原裏10号墳	埼玉県熊谷市	7世紀後半～8世紀初頭	—	—	
19	中尾山古墳	奈良県明日香村	8世紀第1四半期	21.5m	中尾山古墳環境整備委1975	文武陵(707年葬送)
20	武井庵寺塔跡	栃木県桐生市	8世紀初頭	4.3m	平野1997	

八角形墳を想定することが最も妥当であることも確かなのである。

**墳丘の形状について** 吉田古墳の現在の墳丘は、戦前に行われた土取りや長い年月の風化・崩落によって、本来の形状や規模は失われていると言ってよい。したがって現況から墳丘の形状を復元することはほぼ不可能と判断され、これまでのトレンチ調査による知見をもって想定する他はない。

しかし墳丘自体にトレンチを入れたのは第1次調査のみで情報に乏しい(「吉田古墳I」)。第1トレンチのセクションでは、墳丘は地山の上に軟質の土層を積み重ねて形成した、至ってシンプルなものであり、土壇や版築、掘込地業などの痕跡は認められていない。また地方の八角形墳では外護列石を伴うものが一般的であるが、吉田古墳では外護列石や葺石などの痕跡も皆無である。もっとも常陸の古墳自体、外護列石や葺石を伴わないのが通常であるため、むしろ外護列石が伴わないのは吉田古墳の被葬者が外来の一族ではなく在地首長の系譜を引いていることの証左の一つとして指摘できるであろう。

いずれにせよ、墳丘の形状について現段階でコメントできる知見はかなり少ないのである。

また第1トレンチ以外の、第2トレンチから第12トレンチでの周溝の調査で記録したトレンチ壁面の土層堆積を確認してみても、周溝の内側から墳丘が立ち上がる痕跡は何一つ見つかっていない。唯一、第2次調査以降の基本土層であるⅢa層については、墳丘の覆土である可能性が指摘されているが(「吉田古墳I」)、周溝はⅢa層を切って構築されており、Ⅲa層は墳丘盛土というよりは整地層として理解したほうが良いだろう。後世の削平もあって確実なことは分からないが、墳丘の裾の痕跡が全

く認められないことから、多摩市稲荷塚古墳等に見られるような段築構造を想定しても良いのかも知れない。

## 第4節 小結

前節で述べたように、吉田古墳の周溝プランは、八角形墳の可能性を示唆するものであり、現段階では吉田古墳を八角形墳として認識していくことが最も妥当であるとの結論に至った。吉田古墳の造営年代は石室編年から7世紀中葉とみられており、畿内の八角形墳とほぼ同時かもしくは先行するものとみられる。地方の八角形墳は7世紀初頭から認められていることから、畿内の八角形墳に先行するにしてもさほど特異なことではなく、これまでの先学の議論と同様、畿内の天皇陵を中心とする八角形墳の造営の背景とは別途、その意味を考えていくこととなろう。

無論、今後も墳形を検証するための調査を継続して実施し、将来の史跡整備をどのようにしていくかを含めて追究していく必要があることは言うまでもない。

吉田古墳の被葬者像は、石室壁画の存在から九州に出自を持つ多氏の関連性を指摘する意見がかねてよりあったが（川崎1982等）、吉田古墳が八角形墳であるとすれば、直宮氏が述べる如く、中国道教の八方思想に基づく造営であった可能性が高く、被葬者がかかる思想を拝受できる立場にあったことを窺わせる。石室や墳丘については在地の一般的な構造を採用していることから在地豪族の流れを汲む者であった可能性は高いが、その中であえて斬新な八角形墳を採用し、なおかつ石室に壁画を備えた吉田古墳の被葬者はどのような人物だったのであろうか。その答えを出すにはあまりにも情報が不足しており、今後の調査の進展に期す他はないが、少なくとも吉田古墳が那珂川流域の終末期古墳の中で等閑視することのできない歴史的意義を有することは、今次調査によって明かとなったのではなかろうか。

（関口）

## おわりに

本書は国指定史跡「吉田古墳」の2冊目の報告書として、第3次調査の成果を盛り込んだものである。本書を上程するにあたり、まず発掘調査でお世話になった明利酒類様・加藤晴代様・深畑実様をはじめとする近隣住民の皆様、衷心からお礼を申し上げたい。このたびの調査では吉田古墳の墳形について大きな発見があったが、その成果をもたらしてくれた最大の功績は、ひとえに調査に対しご理解とご協力を示して下さった近隣住民の皆様を求めるべきなのは言うまでもない。

※ ※

さて、本報告書でこれまで述べてきたように、第3次調査では吉田古墳が八角形墳である可能性が高いことが判明した。実は、第2次調査の時点において、従来の定説であった吉田古墳＝方墳が否定されたことを受け、多角形墳の可能性も考慮には入れていた。確認された周溝が直線の過ぎるきらいがあったためである。そして第3次調査の結果、八角形墳の可能性を指摘せざるをえない程、周溝が直線的で後角も部分的に認められたことに対し、事前に想定していたこととはいえ大いに驚くとともに、改めて吉田古墳の歴史的意義について思いを馳せざるをえなくなったのである。

周知の通り八角形墳は7世紀後半以降の天皇陵が好んで採用した墳形であり、近年では地方にも八角形墳が展開することが明かとなっている。しかし常陸国においてはこれまで類例がなく、可能性の段階を含めて吉田古墳が初めての事例となる。しかも石室に線刻壁画を備えた八角形墳は全国にも類例がないため、その歴史的評価はきわめて興味深いものと言えるだろう。

かかる興味深い価値を有する吉田古墳について、編者が現時点でできることは、第一に正確な事実記載と、第二に古墳の墳形をめぐる叩き台の提示であった。前者にあつては第I章から第IV章、後者にあつては第V章に述べてきた通りである。特に第V章については、未だ墳形の確定に向けては情報の不足が目立ち、来年度以降の追加調査に期待するところが大きいため、将来、調査の進捗にあわせて大幅な訂正がなされていくことであろう。あくまでも現段階における調査担当者の所見としてご理解頂きたい。また、本来ならば墳形の議論のみに終始せず、古墳時代終末期における在地の政治・社会体制の中で吉田古墳がいかなる意義を有するのか、という最も重要な議論に言及すべきところであったが、情報不足と編者の力量不足のため本書にはあえて盛り込まなかった。次年度以降の調査の進捗を待って、改めて何らかの形で提示したいと考えている。

※ ※ ※

また本書ではあまりボリュームを割けなかったが、第III章で初めて測量図を提示した第2号墳の存在、第IV章で提示した雲母を多量に含む埴輪片の存在（吉田古墳群が筑波山周辺の窯から埴輪を供給していた可能性の検証）、吉田古墳廃絶以後の土地利用（肥土埋納等も含む）など、吉田古墳をめぐる興味・関心は多岐にわたっている。これらについても一歩踏み込んだ議論は後日に託すこととし、取り敢えずは現時点における問題点の整理をしたことで当面の責をふさぎ、本書の締めくくりとしたい。

（関口）

## 引用・参考文献

- 阿久津久・片平雅俊 1992「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館
- 明日香村教育委員会編 1975「史跡中尾山古墳環境整備事業報告書」
- 網干善教 1979「八角方墳とその意義」『橿原考古学研究所論集』第5 吉川弘文館
- 新井哲 2004「多摩川中・下流域における7世紀の古墳の墳丘形態」『明治大学校地内遺跡調査団年報』1 明治大学
- 今尾文昭 2000「寂尊、忍性・律宗系集団と大和の遺跡」『寂尊・忍性と律宗系集団 大和古中近研究会』
- 今尾文昭 2005「八角墳の出現と展開」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館
- 茨城県編 1930「吉田古墳」『茨城県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1号
- 茨城県教育委員会編 1982「重要遺跡調査報告書1」
- 茨城県教育財団編 1993「一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書1」
- 茨城県教育財団編 2003「二の沢A遺跡・二の沢B遺跡（古墳群）・ニガサワ古墳群」（茨城県教育財団文化財調査報告書第208集）
- 茨城県教育庁文化課編 2001「茨城県遺跡地図」（地図編・地名表編）茨城県教育委員会
- 茨城県史編さん原始古代史部会編 1974「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」茨城県
- 茨城県史編さん近世史第一部会編 1968「茨城県史料 近世地誌編」茨城県
- 茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編 1979「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」茨城県
- 茨城県立歴史館編 1991「茨城県史料 考古資料編 弥生時代」茨城県
- 茨城県立歴史館編 1995「茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代」茨城県
- 梅澤重昭 1997a「東日本の八角形墳丘古墳の性格と二期」『月刊考古学ジャーナル』No.414（特集：東日本の八角形墳丘）ニュー・サイエンス社
- 梅澤重昭 1997b「吉井町一本杉古墳の八角形墳丘」『月刊考古学ジャーナル』No.414（特集：東日本の八角形墳丘）ニュー・サイエンス社
- 江原忠明編 1985「改訂 水戸の町名－地理と歴史－」水戸市役所
- 大橋康二 1994「古伊万里の文様」理工学社
- 大森信英 1962「吉田古墳」『日本考古学辞典』日本考古学協会編 東京堂
- 鴨志田篤二 2005「塚塚古墳－関東の彩色壁画古墳－」（日本の遺跡3）同成社
- 河上邦彦 1986「八角形の墳丘」『季刊 明日香風』第19号 飛鳥保存財団
- 河上邦彦 2003a「終末期古墳の問題点」『季刊考古学』第82号（特集：終末期古墳とその時代）雄山閣
- 河上邦彦 2003b「八角形の古墳」『季刊 明日香風』第86号 飛鳥保存財団
- 川口武彦 2002「水戸市栗崎町出土の有槌尖頭器」『婆良峰考古』第24号 婆良峰考古同人会
- 川口武彦 2005「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良峰考古』第27号 婆良峰考古同人会
- 川崎純徳 1982「茨城の装飾古墳」新風土記社
- 瓦吹堅 2000「吉田古墳の銀環」『常総台地』第15号 常総台地研究会
- 瓦吹堅 2003「国指定史跡吉田古墳発掘覚書」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集
- 桐生直彦 1997「稲荷塚古墳の八角形墳丘プラン」『月刊考古学ジャーナル』No.414（特集：東日本の八角形墳丘）ニュー・サイエンス社

- 桐生直彦 2002「王家の谷「和田古墳群」とその周辺」『多摩地域史研究会第12回大会 多摩川流域の古墳時代』多摩地域史研究会
- 熊谷市龍原裏遺跡調査会編 2000『龍原裏古墳群10号墳』
- 郡司良一 1992『私の埋蔵文化財拾遺』第3集(私家版)
- 国士舘大学牛伏4号墳調査団編 1999『牛伏4号墳の調査』内原町教育委員会
- 国府町教育委員会編 1994『史跡柗山古墳発掘調査報告書』(国府町文化財調査報告書9)
- 国府町教育委員会編 1997『史跡柗山古墳保存修理事業報告書』(国府町文化財調査報告書12)
- 国立歴史民俗博物館編 1992『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集(東国における古墳の終末(本編))
- 国立歴史民俗博物館編 1999『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集(装飾古墳の諸問題)
- 国士舘大学牛伏4号墳調査団編 1999『牛伏4号墳の調査』内原町教育委員会
- 小林利晴 1997『畿内の八角墳と地方の八角墳の比較』『東京考古』第15号 東京考古談話会
- 斎藤忠 1952『装飾古墳の研究』吉川弘文館
- 斎藤忠 1973『日本装飾古墳の研究』講談社
- 山武考古学研究所編 2005『台渡里庵寺跡-市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)-』(水戸市埋蔵文化財調査報告書第2集) 水戸市教育委員会
- 志村哲 1997『伊勢塚古墳の八角形墳丘プラン』『月刊考古学ジャーナル』No414(特集:東日本の八角形墳)ニュー・サイエンス社
- 白石太一郎 1982『畿内における古墳の終末』『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 国立歴史民俗博物館
- 新市町教育委員会編 1985『尾市1号古墳発掘調査概報』新市町文化財協会
- 菅谷文則 1973『八角堂の建立を通じてみた古墳終末時の一様相』『論叢 終末期古墳』塙書房
- 鈴木素行 2000『大里糠塚古墳の墳輪-久懸川流域における大型の円筒墳輪について-』『婆良峰考古』第22号 婆良峰考古同人会
- 宝塚市教育委員会編 1985『中山荘園古墳発掘調査報告書』(宝塚市文化財調査報告第19集)
- 瀧野巧 1997『三津屋古墳の八角形墳丘プラン』『月刊考古学ジャーナル』No414(特集:東日本の八角形墳)ニュー・サイエンス社
- 多摩市教育委員会編 1987『稲荷塚古墳-範囲確認にともなう調査-』(多摩市埋蔵文化財調査報告12)
- 多摩市教育委員会編 1991『稲荷塚古墳-八角形墳の調査-』(多摩市埋蔵文化財調査報告24)
- 多摩市教育委員会編 1996『稲荷塚古墳-墳丘部確認にともなう調査-』(多摩市埋蔵文化財調査報告39)
- 地域文化財コンサルタント編 2005『大淵町遺跡-グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』(水戸市埋蔵文化財調査報告書第3集)水戸市教育委員会
- 常澄村史誌編さん委員会編 1989『常澄村史 通史編』常澄村
- 東京航業研究所編 2006『大淵町遺跡(第3地点)-市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』(水戸市埋蔵文化財調査報告書第7集)
- 豊島区遺跡調査会編 1998『陶磁器・土器 分類・計数基準』(豊島区教育委員会『伝中・上富士前II』別冊)
- 鳥居龍蔵 1928『図画の存在する常陸の二古墳(下)』『武蔵野』第11巻第3号 武蔵野会編 誠志堂印刷出版部
- 直宮憲一 1988『八角墳再考』『網干善教先生華甲記念 考古学論集』網干善教先生華甲記念会
- 直宮憲一 2003『墳丘の形』『季刊考古学』第82号(特集:終末期古墳とその時代)雄山閣

- 中尾山古墳環境整備委員会編 1975『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』明日香村教育委員会
- 生田日和利 2005『茨城県北部における前方後円墳以後と古墳の終末』『前方後円墳以後と古墳の終末』シンポジウム資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 日考研茨城編 2006『台渡里遺跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第6集）
- 日考研茨城編 2007『米沢町遺跡（第5地点）－住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第13集）
- 平野進一 1997『いわゆる武井庵寺塔心礎とされる八角形墓墳』『月刊考古学ジャーナル』No.414（特集：東日本の八角形墳）ニュー・サイエンス社
- 水戸市教育委員会編 1976『水戸市埋蔵文化財（分布調査報告書）』
- 水戸市大薮町遺跡発掘調査会編 1988『水戸市大薮町遺跡』
- 水戸市教育委員会編 1971『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書（応急版）』
- 水戸市教育委員会編 1982『常陸安戸屋古墳』
- 水戸市教育委員会編 1984『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（昭和58年度版）』
- 水戸市教育委員会編 1995『水戸市北屋敷古墳』
- 水戸市教育委員会編 1999『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成10年度版）』
- 水戸市教育委員会編 2004『台渡里廃寺跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』
- 水戸市教育委員会編 2005『台渡里廃寺跡－範囲確認調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第1集）
- 水戸市教育委員会編 2006『吉田古墳Ⅰ－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第10集）
- 水戸市史編さん委員会編 1963『水戸市史』上巻 水戸市役所
- 水戸市史編さん委員会編 1999『概説 水戸市史』水戸市役所
- 水戸市下畑遺跡発掘調査会編 1985『水戸市下畑遺跡』
- 水戸市薬王院東遺跡発掘調査会編 1990『薬王院東遺跡－千波中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』
- 水戸市立博物館編 1990『特別展 装飾古墳－地下を彩る名画の世界－』
- 右島和夫 2001『6世紀後半における多角形円墳の出現とその背景』『群馬県立歴史博物館紀要』第22号 群馬県立歴史博物館
- 三井考淵編 2006『水戸城跡－三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書－』茨城県・水戸市教育委員会
- 宮崎報恩会編 1969『新編常陸国誌』常陸書房
- 茂木雅博 1985『常陸における古墳研究抄史』『常陸国風土記と考古学』大森信英先生還暦記念論文集刊行会編 雄山閣
- 茂木雅博 1987『日本の古代遺跡36 茨城』保育社
- 茂木雅博 2007『常陸の古墳』同成社
- 山梨県埋蔵文化財センター編 1995『経塚古墳』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第109集）山梨県教育委員会
- 吉岡町教育委員会編 1996『三津屋古墳』（吉岡町文化財調査報告書第7集）
- 吉岡弘樹 1997『経塚古墳の八角形墳丘プラン』『月刊考古学ジャーナル』No.414（特集：東日本の八角形墳）ニュー・サイエンス社
- 脇坂光彦 1992『八角形墳』『季刊考古学』第40号（特集：古墳の形の謎を解く）雄山閣

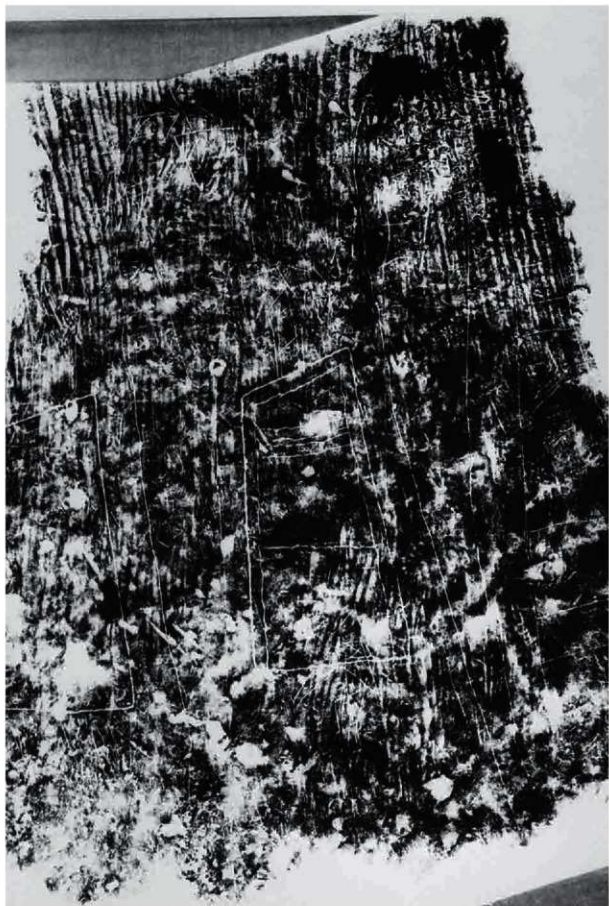


# 写真図版



吉田古墳の位置（○内が吉田古墳，昭和23年4月米軍撮影）





第 1 号墳壁面拓影



トレンチ遠景（西から）



プラン検出状況（西から）



トレンチ土層堆積（南から）



1号遺構完掘（南から）



周溝検出状況 (北から)



2号遺構土層堆積状況 (南から)



3号遺構土層堆積状況 (南から)



2号遺構完掘 (南から)



3号遺構完掘 (北から)



4号 (上)・5号遺構 (下) 検出状況 (北から)



4号 (左)・5号遺構 (右) 土層堆積状況 (東から)



トレンチ遠景（南から）



周溝検出状況（南から）



周溝土層堆積状況 (E-Fライン, 南から)



周溝検出状況 (西から)



周溝土層堆積状況 (C-Dライン, 硬化層残し, 南から)



トレンチ土層堆積 (南から)



周溝検出状況 (東から)



作業風景 (東から)



トレンチ周溝検出状況（西から）



トレンチ完掘状況（東から）



トレンチ完掘状況（西から）



調査スタッフ



現地説明会



埋め戻し風景

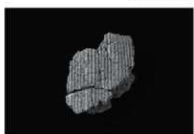




1



2



3



4



5



6



7



8



9表



9裏



10



11



12



13



14表



14裏



15



16



17



18



19



20



21



22・23



24



25



26表



26裏

第3次調査出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	よしだこふん に							
書名	吉田古墳 II							
副書名	史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第10集							
編集者名	関口慶久							
著者名	関口慶久、川口武彦							
編集機関	水戸市教育委員会							
発行機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎029-224-1111							
発行年月日	2007(平成19)年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
よしだこふんぐん 吉田古墳群 かいいちこうふん 第1号墳	いほらきけんみよし 茨城県水戸市 もとよしだぢやう ほか 元吉田町347他	8201	72	36° 21′ 30″	140° 28′ 29″	第3次調査 2006.11.22 ～ 2007.1.10	131.18㎡	史跡・環境 整備計画に 伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
よしだこふんぐん 吉田古墳群 かいいちこうふん 第1号墳	集落	弥生	なし	弥生土器		<p>国指定史跡の装飾古墳「吉田古墳」の発掘・測量調査。</p> <p>本報告書では吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査成果および、第1～2号墳周辺の測量調査成果を掲載。</p> <p>第3次調査では、緩やかな稜角を有する周溝が検出され、平面プランの検討から第1号墳が八角形墳である可能性が高いと判断するに至った。</p> <p>また第2号墳の測量図を初掲載した。</p>		
	古墳群	古墳	周溝	埴輪・土師器				
	集落	奈良・平安	なし	土師器・須恵器				
	村落	近世	土坑	磁器・陶器・土器・銭貨				
	村落 都市	近～現代	胎衣埋納土坑	磁器・土器・磁製品・硝子製品				

※北緯・東経は測地系2000(世界測地系)対応

## 水戸市埋蔵文化財調査報告

第1集	台渡里麩寺跡-範囲確認調査報告書-	2005年3月
第2集	台渡里麩寺跡-市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)-	2005年4月
第3集	大鋸町遺跡-グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	2005年8月
第4集	台渡里麩寺跡-市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)-	2006年3月
第5集	台渡里遺跡-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	2006年3月
第6集	吉田古墳Ⅰ-史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第1次・第2次調査報告書-	2006年3月
第7集	大鋸町遺跡(第3地点) -市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	2006年3月
第8集	環遺跡(第3地点) -ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	2007年3月
第9集	環遺跡(第4地点) -プランタンコリヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-	2007年3月
第10集	吉田古墳Ⅱ-史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書-	2007年3月
<hr/>		
水戸城跡	-三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書-	2006年9月

---

### 水戸市埋蔵文化財調査報告 第10集

## 吉田古墳Ⅱ

-史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1古墳の第3次発掘調査報告書-

2007年3月20日 印刷

2007年3月27日 発行

編集・発行 水戸市教育委員会 〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 TEL:029-244-1111  
印刷 株式会社あけぼの印刷社 〒310-0804 茨城県水戸市白梅1-2-11 TEL:029-227-5505

---



